PMF 将来ビジョン 2020

― 平和をつなぎ　人をつなぎ　音楽をつなぐ　PMF のこれから ―

2020 年 9 月

PMF 将来ビジョン検討委員会

この「PMF 将来ビジョン 2020」は、創設後 30 年を迎えた PMF について、秋元克広 PMF 組織委員会理事長（札幌市長）から将来ビジョン策定の委嘱を受け、約 1 年半にわたり議論を重ね、提言書としてここにまとめたものです。

本書は、PMF のこれまでの成果を検証するとともに、目指すべき将来像、今後の課題と解決の方向性などを示しています。

PMF 将来ビジョン検討委員会

本ビジョンの要点
― このビジョンで広くお伝えしたいこと ―

PMF 将来ビジョン検討委員会は、PMF の 30 年の歴史を振り返って、世界の音楽界に若手音楽家の輩出という多大の貢献を行ってきたことから、創設の理念に照らして大きな成功を収めてきたと評価する。しかし、この成功は自動的にもたらされたものではない。開催を継続するにあたっては多くの困難に直面したが、関係者の多大な努力により乗り越えてきた。そして 2020 年、世界的なパンデミックの猛威の中で PMF の開催中止という現実に直面した。これからの 30 年に向けて、確実に PMF を継続していくために、いま改めて基本理念やミッションを確認しておく必要がある。

創設の経緯から、PMF の札幌開催は歴史的偶然であったが、30 年を経て歴史的必然となった。創設者の故レナード・バーンスタインが札幌の地に置いた礎石の上に、彼の理想を自分のものとした多くの人たちによって育まれ、プロを目指す世界の若手音楽家にとって今や参加すべき音楽祭の一つとなった。30 年の実績を踏まえて、PMF の継続実施はもはや札幌の歴史的使命である。

PMF の将来について本ビジョンで広く訴えたいことは、バーンスタインの理想に基づく基本理念を堅持し、世界の若手音楽家に飛躍のための跳躍台を提供し続けることで世界の音楽文化に貢献し続けること、そのために時々の社会経済環境変化に対応して柔軟に変化することである。30 年の歴史は大変重いものであるが、しかしその実績と成果はこれからの継続実施を無条件に保証するものではない。今後も様々な困難に直面するであろうが、その時にこそ基本理念に立ち返り、何を守り、何を変えるのかを問わなければならない。

◆　30 年間の積み重ね

PMF の 30 年を語るにあたって、「世界に向けて」と「札幌のために」という二つの視点が必要になる。ホストシティたる札幌の熱意と共感無くしては PMF の世界に対する貢献の継続は不可能だからである。

30 年間で 77 ヵ国・地域から延べ 3,607 名の若い音楽家が、厳しいオーディションを経て札幌に参集した。1 カ月の研鑽を携えて世界の音楽界に飛び立ち、今や全世界の少なくとも 165 のオーケストラに PMF 修了生は在籍しているほか、様々な立場から世界の音楽界で活躍している。世界から優秀な若手音楽家を迎える努力を続けてきた。特に 2015 年以降、ネット・オーディションに移行してからは応募者の国籍は多様化し、5 年間で 83 ヵ国・地域からの参加があった。2015 年以降、インド、ミャンマー、ホンジュラス、アルメニア、アゼルバイジャンといった国からの挑戦者を迎えることが出来た。

毎年 400 近いクラシックの音楽祭が世界中で開催されているが、オーケストラスタディを中心とした教育音楽祭は、アメリカ 2 か所、ヨーロッパ 2 か所と PMF の 5 か所しかない。その中で極めてインターナショナルなアカデミー生と教授陣を主体とした演奏会プログラムが組まれるのは PMF だけであり、教育音楽祭としてユニークな存在になっている。

教育とともに PMF の重要な顔は、フェスティバルとしての華やかな顔である。コンサートホールでの演奏会とともに、演奏家が街なかに出て市民に近づいていくアウトリーチコンサートが毎年数多く開催され、札幌の街を音楽で満たしている。さらに、演奏会場に行く

ことが困難な人たちを訪問するボランティアコンサート、小学 6 年生がオーケストラと共演するリンクアップ、北海道でクラシック音楽を学ぶ学生を対象としたマスタークラスの開催や音楽教育関係者と教授陣の対話といった多彩なプログラムにより、北海道・札幌に音楽文化を根付かせる一助を担ってきた。

PMF30 年の実践は、多くの札幌市民がクラシック音楽を札幌が誇るべき文化と考える判断の後押しをしたと言えるだろう。

◆ PMF が目指すもの

PMF に関わる全ての人びと（PMF コミュニティ）の願いは、アカデミー生として参加した若手音楽家が、単に演奏技術の向上にとどまらず、音楽について深い洞察を持ち、人類愛に根差した音楽家としての姿勢を確立して、世界で活躍する姿を見ることである。

◆ PMF のミッション

・教育のために : 世界の才能ある若者に分け隔てなく最高水準のオーケストラスタディの機会を提供し、次世代を担う真のプロフェッショナル音楽家を輩出することで世界の音楽芸術に貢献する。
・祝祭のために : 札幌市民、北海道民のみならず、国内外の聴衆に最高のクラシック音楽を届ける。
・音楽のあふれるまちにするために : クラシック音楽に触れる機会が少なかった人たち、特に子どもたちに音楽の楽しさに触れる機会を提供すること、コアなファンを越えて幅広い聴衆にクラシック音楽を届け、まちを音楽で満たす。

◆ 今後の継続に向けての課題と解決の方向の要点

・（教育のために）企画検討段階からの関与に積極的な芸術監督の就任が望ましい。多国籍・多文化・多言語のアカデミー生と教授陣という国際性の維持強化とそのための施策展開。異文化交流と多様性に根差す新たな音楽創造の場として、アジアで開催の最大の国際教育音楽祭としての役割の追求。
・（祝祭のために）平和を希求する音楽祭をアピールするにふさわしい演奏機会の模索。札幌と世界をつなぐフェスティバルとして世界から聴衆を迎え入れる。バーンスタインのレガシー継承の場としての活動。市民とともに創る音楽祭としての側面の追求。
・（音楽のあふれるまちにするために）演奏家が街に飛び出すことで音楽の豊かな世界の魅力を多くの必ずしも熱心なファンではない人々に伝える。豊かな感性を持つ子供たちに良質なオーケストラ音楽に親しむ機会を提供する。アカデミー生に過度の負荷をかけない形での交流プログラムから演奏参加まで多彩な市民参加型プログラムの開発。
・（持続的開催に向けて）専門家委員会と教授陣ネットワークの活用による企画・運営体制の再構築。運営を担うスタッフの専門性向上支援。安定的な財政の確立に向け、国内外に広く支援体制を構築。幅広く、継続的な情報発信と働きかけ。

◆ PMF コミュニティのビジョン

PMF に関わるすべての人たち（PMF コミュニティ）は、PMF を誇りとし、かけがいのない財産として大切にし、そして使命であると考えるビジョンを共有する。

目次

はじめに 1

追記 2

第１章　PMF のミッション 5

1-1　**PMF** の原点 5

1-1-1　「平和のための音楽祭」 5
1-1-2　バーンスタインのオープニングスピーチ 5
1-1-3　バーンスタインの遺志を引き継ぐ音楽家たち 7
1-1-4　札幌と **PMF** 7
1-1-5　偶然を必然へと変えた歴史 7

1-2　**PMF** の定義とその特徴 8

1-2-1　国際性 8
1-2-2　教育 8
1-2-3　祝祭 9
1-2-4　国際教育音楽祭としてのクオリティの維持 9

1-3　**PMF** の使命（ミッション） 10

第２章　PMF30 年の実績 11

2-1　**PMF** の **30** 年を振り返る 11

2-1-1　数字で見る **PMF** の **30** 年 11
2-1-2　**PMF** の諸事業 11
2-1-3　**PMF** の認知度 12
2-1-4　世界の音楽祭のなかでの **PMF** の位置づけ 13
2-1-5　**PMF** に対する参加者の評価 17
2-1-6　アンケート調査による修了生の現況 17
2-1-7　**PMF** の経済効果 19

2-2　過去 **2** 回の将来構想を振り返る 20

2-2-1　「**PMF2000** 年構想」（**1999** 年 **4** 月） 20
2-2-2　「**PMF** 新構想／新たなステージへ」（**2012** 年 **3** 月） 20

第３章　PMF のミッションの遂行状況と今後の課題解決へ向けて 22

3-1　若手音楽家の教育の場としての **PMF** 22

3-1-1　国際教育音楽祭としての特徴と実績 22
3-1-2　将来に向けての課題と解決方向 25

3-2　音楽祭（フェスティバル）としての **PMF** 27

3-2-1　フェスティバルとしての実績 27
3-2-2　将来に向けての課題と解決方向 28

3-3　音楽のあふれるまちにするための **PMF** 31

3-3-1　これまでの活動実績 31
3-3-2　将来に向けての課題と解決方向 32

第４章　持続的開催に向けて：継続性を確保する上での課題と解決方向 35

4-1　組織 35

4-1-1　企画と運営体制の再構築 35
4-1-2　持続可能な組織体制 35
4-1-3　スタッフの人材育成と組織力の向上 35
4-1-4　ボランティアとの連携 36

4-2　ファイナンス 36

4-2-1　幅広い支援が必要 36
4-2-2　支援組織の国際化 36

4-3　広報・コミュニケーション 36

4-3-1　市民への説明・市民の理解 36
4-3-2　道外、海外への情報発信 37
4-3-3　多様なコミュニケーションツールの活用 37
4-3-4　修了生とのコンタクト継続 37

4-4　その他検討すべき事項 37

4-4-1　不測の事態を想定したシミュレーションの実施 37
4-4-2　SDGs（持続可能な開発目標）の視点を踏まえた取り組みの推進 38
4-4-3　ビジョンに沿った行動計画の策定及び定期的な活動点検 38

第５章　PMF コミュニティが掲げるビジョン 39

参考－ＰＭＦ将来ビジョンの策定経過等 41

はじめに

1990 年に創設されたパシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌（PMF）は 2019 年に第 30 回の節目を迎えた。PMF が 30 年にわたって開催し続けられたのは、指導者、アカデミー生、協賛各社、ボランティア、札幌市民、北海道民、文化行政担当者、報道関係者、組織委員会、その他音楽を愛する人たちからなる「PMF コミュニティ」とでもいうべきものの決意と熱意と善意の賜であり、心より敬意を表したい。しかし、ともすると開催すること自体が自己目的化するとき、そのコミュニティは内へと閉ざされ、その障壁が発展の阻害となってしまいかねない。音楽芸術も、政治や経済の変化、人々の関心の推移、とりわけ今日のヒトとモノの移動の急激な増加、情報革命とも言われる社会情勢と無縁ではいられない。PMF が今後 10 年、20 年、さらにその先へと続いてゆくためには、さまざまな環境変化に即応し、不断の改善努力が必要なことは言うまでもない。

そのために本委員会が議論したのは、まず、PMF は一体何のために開催されているのか、時代や社会が変わっても変わらない PMF の核となる理念とは何なのか、つまり PMF のミッション（目的、使命、役割）を改めて定義ないし再定義することであった（第 1 章）。

第二に札幌がこの 30 年間に成し遂げた実績を具体的な数字をもとに、PMF が果たしている札幌での、北海道での、世界での意義を明らかにした。その詳細は別途ニッセイ基礎研究所に委託した PMF の成果に係る調査業務の報告書を参照いただきたいが、私たちは改めて PMF が積み重ねてきた 30 年の厚みに圧倒される（第 2 章）。

とはいえ、PMF が掲げるミッションが十分に実現されているのかの検証が必要である。PMF がミッション遂行のために実施してきたこと、その不足を補って将来的な課題とすべきことを列挙した（第 3 章）。さらには PMF を取り巻く社会環境の急激な変化に伴って直面している諸問題を提示した（第 4 章）。こうした課題解決に向けて短期的また長期的に取り組むべき具体的な行動計画に関しては、今後、組織委員会と札幌市を中心に策定され、実施されるべきであるが、本委員会でも一定の方向性は示しえたものと考える。

その上で、最後に本委員会に諮問された PMF の将来ビジョン（長期展望）を広く PMF コミュニティに共有されるものとして掲げた。ただしこの際の PMF コミュニティとは「PMF ムラ」といった特定の関係者によって構成され、独善的で閉ざされた集団ではないことはもちろんである。これまでの関係者はもちろんのこと、PMF の理念に共感し、その実現を願い、音楽芸術にどのようなかたちであれ関与することに歓びと誇りとする、世界中のあらゆる人々に開かれ、ひとりでも多くの人を輪の中にダイナミックに巻き込んでゆく運動体のことである。単に夢を語るのであれば、いくらでも膨らますことはできるが、それでは現実味のないままに終わってしまう。とはいえ現実の制約に縛られているままでは、この先何の希望も見いだすことができない。この両者の緊張関係のなかで構想されたこのビジョンが、今後こうした PMF コミュニティの実現に寄与し、目指すべき灯台の灯りなることを願っている。

2020 年 3 月

PMF 将来ビジョン検討委員会座長　北村清彦

追記

2019年－20年の冬は記録に残る雪の少なさだった。雪まつりのため、労を厭わず遠方より雪を運んで、例年のように大雪像を作り上げていた。その頃、中国の武漢で原因不明の肺炎が流行し、そのため都市は封鎖され、また中国政府は春節を控えて団体での海外旅行を禁止する措置を執る、とのニュースが流れてきた。それでも個人の観光を制限するものではなく、折しも訪れていた中国人観光客は、中国よりも日本の方が清潔だから安心しているとテレビのインタビューに答えていた。例年よりも人出は少なかったとはいえ、雪まつりは頃合いも良く雪が舞う中で、連日楽しげな光景を繰り広げていた。だがそのさなかにも、新型コロナウイルスは私たちの中に静かに、そして深く潜み混んでいた。

道内で初めて感染が確認されたのは、1月28日、武漢からの旅行客だった。それでもまだ病魔は対岸での出来事に過ぎなかった。2月3日、横浜港に停泊した大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号で集団感染が発生し、社会が騒然となった。それでもまだ何か人ごとのようであった。しかし2月14日、道民初の感染者が確認され、それは他の誰でもない、新型コロナウイルスが私たち自身に襲いかかる危機であることに、ようやく気がついたのだった。

2月27日、道内で15人の感染が確認され最初のピークを迎えた翌日、道は全国に先駆けて独自に「緊急事態宣言」を発令し、外出や移動の自粛、企業の休業要請などがなされ、学校も学年末の慌ただしい中、突然、休校となり、大学入試も実施方法の変更、卒業式や終業式の中止、春の高校選抜野球大会も中止になるなど、社会はすっかり出口の見えない闇の中に入ってしまった。マスクや消毒液、医療用ガウンや手袋の入手が容易でないことに付け込んで、生活必需品の買い占めや高額な転売が横行し、「三密」「濃厚接触」「クラスター」「リンク」「オンライン」「ソーシャルディスタンス」「ステイホーム」など、これまで聞き慣れない用語が飛び回った。

3月19日には道の緊急事態宣言も終了となり、いったんは小康状態になったように思えたものの、感染の封じ込めはそう簡単ではなかった。欧米からの帰国者を中心に首都圏や関西圏で爆発的な感染が発生し、東京オリンピックの一年延長発表に続き、政府は4月7日に新型コロナウイルス特措法に基づき7都府県に緊急事態宣言を発令。道内でも首都圏との往来などを通じて第1波を遙かに上回る勢いで感染が拡大、4月13日に道と札幌市は共同で緊急共同宣言するに至り、第一次産業、観光、小売、飲食、運輸・交通、サービス、あらゆる業態に深刻な影響が及んだ。

アート関連もまた例外ではない。2月22日の演奏会を最後に札幌交響楽団の公演が中止となったのをはじめ、すべての演奏会、展覧会、公演などは中止または延期となり、コンサートホール、ライブハウス、美術館、博物館、ギャラリー、劇場、映画館、文学館などもすべて閉鎖となった。

そして4月3日、私たちのPMF2020も中止の発表がなされた。日本のみならず世界的にパンデミック（爆発的感染）が起こっている状況下では、アカデミー生・教授陣の、派遣も受け入れも不可能なのであれば、大変痛恨の極ではあるが31年目にして初めての「中止」

という以外の選択肢はありえなかった。

アートは水や空気と同じように、私たちの生命維持には不可欠なものであると、私たちは考えている。この自粛期間中にも、インターネットなどを通じたアートによって救われたことだろうか。また困難な状況のもとでもさまざまな工夫を凝らして、私たちに喜びや悲しみの感情を喚起させてくれたことだろうか。ただ本来、そうした私たちの生命（ライフ）を支えてくれる芸術の、あるいはアーティストの生活（ライフ）が脅かされていることに、私たちは大変心を痛め、また危惧している。一部民間では、クラウドファウンディングなどにより、経済的苦境に陥っている劇場や楽団などを支援する動きもある。しかし、日本政府としてそのような芸術文化に対する支援は極めて遅い、というよりほとんど手がつけられていない。

ドイツ政府は 3 月 25 日発表した新型コロナウイルスに対する経済対策の中で、「私たちの民主主義社会は、少し前までは想像も及ばなかったこの歴史的な状況の中で、独特で多様な文化的およびメディア媒体を必要としている。クリエイティブな人々のクリエイティブな勇気は危機を克服するのに役立つ。私たちは未来のために良いものを創造するあらゆる機会をつかむべきだ。そのため、次のことが言える。アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要なのだ。特に今は」（モニカ・グリュッタース文化相）と断言、文化機関や文化施設を維持し、芸術や文化によって生計を立てるフリーランサーや芸術家、個人業者への支援が文化的政治的最優先事項であるとした。芸術文化の伝統や産業構造に占める芸術文化の割合などの違いがあり、そうした施策を直ちにわが国でも採用することはできないにしても、私たちにそのような哲学が、理念が、一片も見受けられないことがなんとも口惜しい。

いや、理念がないわけではない。「PMF は音楽を通じて世界の平和に貢献し、将来を担う若手の音楽家を育成することを使命とする。そしてそのような崇高な使命を故・レナード・バーンスタインから引き継いだ札幌市民にとって PMF は世界に誇るべき事業である」という PMF の理念を、今一度私たちの中心軸として立て直そう。ただその実現が困難であることは言を俟たない。私たち「将来ビジョン検討委員会」の答申は、本来 2020 年 3 月末に提出されるはずのものであったが、今日まで発表を見合わせていた。今後のコロナウイルスとの共存という新たな状況のもとで読み返すと、所々に違和感がないわけではない。その点はご寛恕いただきたいが、PMF を持続的に発展させるための「IT 環境の積極的活用」「国内外におけるファンドレイジングの強化」「他の機関、組織、イヴェントとの連携の推進」などの方向性はむしろ強力に推し進められるべきだと思われる。

6 月下旬、経済活動や人の往来の制限も撤廃され、一時の闇の中からは抜け出た感はある。コンサートホールや美術館、劇場なども制限はあるものの再開されつつある。しかしこの明るさが果たして本当に闇の終わりなのか、それとも新たなそしてもっと深い闇に向かう束の間の明るさなのか、誰にも分からない。少なくとも世界的にみれば、パンデミックはまったく終息の気配を見せてはいない。ただひとつ確実なことがある。医療を崩壊させてはならない、経済を失速させてはならない。同時に芸術を凋落させてはならない。そのどれが欠けても私たちの心身の健康を保つことができない、ということである。

ようやく札響も新型コロナウイルス感染の予防と拡大防止のための対策を講じた上で 8 月 1 日より演奏会を再開させた。様々なガイドラインに基づきながら、何としてでも医療と経済と芸術が相矛盾することなく成立する地点を見いだそう。PMF もどうあるべきなのかの模索は続くだろう。来年に向けて、10 年後に向けて、何が実現可能なのか、具体的な行動計画を立てて、着実に実行してゆかなければならない。この将来ビジョンがそのために少しでも資することを願ってやまない。そして来年こそは音楽と共に生きていることを皆で喜びあいたい。

2020 年 9 月

PMF 将来ビジョン検討委員会座長　北村清彦

第１章　PMF のミッション

1-1　PMF の原点

1-1-1　「平和のための音楽祭」

パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌（PMF）が 1990 年に、この札幌において開催されるに至ったのは、さまざまな政治的、経済的、社会的な偶然が重なった結果であった。日本では元号が昭和から平成に変わった 1989 年、東欧ではポーランド、ハンガリー、ルーマニアなど次々と社会主義政権が崩壊し、ついにはベルリンの壁が壊され東西ドイツの統一が実現した。目を転じれば北京では天安門事件により民主化運動が弾圧される事態となった。

PMF を北京で開催することを構想していた故・レナード・バーンスタインはこのことを深く憂慮したに違いない。なぜなら「パシフィック」とは単なる地理的概念ではないからである。マゼランが 500 年前（1520-1521 年）に、世界一周の航海の途上でマゼラン海峡を抜けてこの海洋に入った時に、荒れ狂う大西洋と比べたその穏やかさに、"Mar Pacifico" （平和な海）と表現したことに由来するという。つまり PMF の名称にある“Pacific”の意味は、平安、平和、和解、相互理解の希求ということであり、同時に環太平洋、アジアへの視線を包含する言葉でもある。バーンスタインは「平和のための音楽祭」、「音楽を通じて実現する平和」という理念を、アメリカ合衆国（タングルウッド音楽祭）と欧州（シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭）に並ぶ音楽祭をアジアの地で創設することによって現実化しようとしていたわけである。

とりわけバーンスタインが世界のなかでのアジアという視野を持っていたことが重要である。実際、PMF はアジアで開催される国際教育音楽祭であるという姿勢を確立し、アジアで開催することの意義を強く打ち出してきた。この間、最もダイナミックに活動し変化を続けるアジアにおいて、この地域の多様性を基盤に音楽芸術の領域で伝統と革新をけん引する次世代の音楽家を輩出し続けることは、アジアのためということではなく、世界の音楽芸術が新たなステップに歩を進めるうえで重要な貢献となると、バーンスタインは見通していたのである。

1-1-2　バーンスタインのオープニングスピーチ

PMF はどのような音楽家を育てるのか、バーンスタインという 20 世紀を代表する一人の、音楽家としても教育者としても、そして何よりも人間的に卓越した人物がオープニングスピーチ（1990 年 6 月 26 日）で語った言葉は、このスピーチに立ち会った人たちに一様に、深く心に刻み込まれている。

改めてバーンスタインの思いを受け止めて、目指すべき目標を表現する。

「PMF に関わる全ての人びと（PMF コミュニティ）の願いは、アカデミー生として参加した若手音楽家が、単に演奏技術の向上にとどまらず、音楽について深い洞察を持ち、人類愛に根差した音楽家としての姿勢を確立して、世界で活躍する姿を見ることである。」

…. And I now must make the choice again of how best to serve music, and serve people through it. Should I spend whatever days the good Lord gives to me going back to my first love, the piano, and playing all the Beethoven Sonatas again? Should I just go on being a conductor playing all the Brahms Symphonies again year after year? Should I devote myself only to being a composer and writing the various kinds of music that I do write? When you get to be 71, you consider such problems.

My decision has been, without too much difficulty, to spend most of the remaining energy and time the Lord grants me with education, sharing as much as I can with younger people – especially with very much younger people –, whatever I know not only about music, but also about the arts, and not only about arts, but also about the relation between art and life. And about being oneself, finding one's self, "knowing who you are" and doing the best possible job. If I can communicate some of this to as many young people as possible in the years that remain to me, I will be a very happy man.

This Pacific Music Festival is one very large aspect of this commitment, which I hereby make for the rest of my life.

Leonard Bernstein

私は今、再び選択に迫られています。音楽のために、そして音楽を通じて人々のために何をなすのがベストであるか。神から与えられた残りの時間を、一番最初に愛したピアノに立ち返り、ベートーヴェンのソナタ全曲を演奏すべきものなのか。あるいは指揮者としての活動に専念し、ブラームスの交響曲全曲を演奏し続けるべきか。それとも作曲家としての活動に専念し、様々な曲を作るべきなのか。71 歳にもなれば、そのような問題について、考えるものです。

そして、それほど迷うこと無く、このような結論に達したのです。残ったエネルギーと神が与えたもうた時間を教育に捧げ、私が知っていることすべて、分かち合えるものは何でも、多くの若い世代、そのなかでも特に若い人たちと分かち合うべきだと。音楽についてだけではなく、芸術についても、そして芸術についてだけではなく、芸術と人生の関係についても。更に、自分らしくあることについて、真の自分を知ること、「自分が何であるのかを知ること」、そして最善を尽くすことについても。このようなことについて、できるだけ多くの人々に伝えることが出来るなら、私はとても幸せです。

そして、パシフィック・ミュージック・フェスティバルこそ、私の残された人生を捧げるべき献身と情熱の対象なのです。

レナード・バーンスタイン

1-1-3　バーンスタインの遺志を引き継ぐ音楽家たち

残念ながら、バーンスタインその人はこの後まもなくこの世を去った。しかし彼の言葉は残った。彼の高い理想を掲げて創設した音楽祭は、彼の崇高な理念を理解し、共感する世界水準の指導者たち（指揮者、教授陣や共演したソリストたち）の積極的な参加によって引き継がれることになる。第 2 章におけるこれまでの実績の検証や、ニッセイ基礎研究所に委託した PMF の成果に係る調査で詳細に報告されているので、ここでは概略にとどめるが、現在まで、世界 77 ヶ国・地域からの延べ 3,607 名のアカデミー生が修了し、彼らは、現在、世界の主要なオーケストラに在籍しているほか、さまざまな形で音楽活動を展開している。また世界各国から将来を嘱望される若手音楽家の参加が、競争的な環境下で実現している。すなわち、参加希望者の音楽性のみが選抜の際の考慮事項であり、国籍や経済的条件をはじめとする様々な条件に何ら制約は無い。アカデミー生と呼ばれる参加者たちは、世界に開かれた場で平等な立場で音楽を創りだすことに専念しているのである。

1-1-4　札幌と PMF

また札幌という都市もバーンスタインの言葉に突き動かされて 30 年の歩みを続けてきたといっても過言ではない。この間、困難な状況がなかったわけではないが、バーンスタインによって札幌に創設された PMF は、単なる歴史的事実である以上に、札幌に課された歴史的使命でもあり、また歴史的名誉でもある。PMF にかかわるすべての人々の努力により、札幌はこの音楽祭を自分たちのものにした。幸い、札幌は PMF を受け入れるための条件がそろっていた。すなわち、札幌はクラシック音楽に限らず、多様な文化芸術活動を受容し、創造性に富んだ活動を歓迎する都市である。事実、PMF がまだ構想段階の 1988 年には世界的彫刻家、イサム・ノグチが来札しモエレ沼公園の造成に取りかかっているし、遠く振り返ればクラーク以来、北海道や札幌は常に海外からの新たな刺激を受容し続けてきたのである。また都市的機能が充実しているが、同時に音楽家が音楽に集中できる静かな環境にも恵まれている。 さらに札幌には音楽祭を開催するに足る世界水準のコンサートホールや自然豊かな野外ステージをはじめとして、受け入れの施設が充実している、等々。しかしこれらは 30 年続けてきた今だから指摘できることなのであって、むしろ事態は逆であり、PMF が札幌という都市の文化水準を向上させ、都市の魅力を高め、私たち市民の芸術に対する意欲の増大に貢献してきたのである。私たちは決して PMF が札幌に対して果たしてきた役割を過小評価してはならない。

1-1-5　偶然を必然へと変えた歴史

しかし札幌市の、また札幌市民のこの音楽祭を継続して開催する意欲と能力は、決して一朝一夕に身についたものではない。多方面からの多くの支援を得ながら、1990 年以降、毎年継続して開催してきたという実績と蓄積された経験があり、この間、かつて PMF でアカデミー生として学んだ修了生が、今や指導者として戻ってきているという

循環、つながりが生まれて来ている。これはバーンスタインが望んだように、タングルウッド音楽祭やシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭に並ぶアジアの音楽祭が、この札幌において実現している、ということに他ならず、札幌の大いなる誇りとすべきことである。札幌が PMF の開催地となったのはある種、歴史的偶然ではあったが、この 30 年はそれを歴史的必然へともたらしたのである。

1-2　PMF の定義とその特徴

一言で PMF を定義するならば、

「札幌で毎夏開催される、世界から選抜された真のプロを目指す若手音楽家にオーケストラスタディを中心とした教育と成長の機会を提供する国際教育音楽祭」

ということになるだろう。では「国際教育音楽祭」とはいかなることなのだろうか。これには多少の説明が必要である。

1-2-1　国際性

「国際性」はいささか使い古された言葉ではあるが、改めて再定義するなら、各国・各地域がナショナリズムで内向きの傾向を見せている昨今の状況に対して、文化多様性のあり方を模索している 21 世紀の世界状況の新たな規範を示すことだといえる。生物多様性であれ、文化多様性であれ、多様性の喪失はその種や文化の死を意味するが、PMF は、世界各国からさまざまな背景を持つ若者が集まり、人種、民族、国籍、言語、性、思想信条の違いを乗り越え、相互に認め合いながら一つの音楽を創造する場である。また指導する側もアメリカと欧州のそれぞれ卓越した教授陣を招聘するという体制をとっていることも特筆すべきことである。楽器の取り扱いから演奏法に至るまで、それぞれのスタイルがあり、それぞれが正しい。私たちに課せられている諸問題には、いつでも、どこでも、誰にでもあてはまる唯一の普遍的解答があるわけではなく、現場の状況に応じて、またこれまでの経験知を参照して、その都度の最適解を求めなければならない。その積み重ねが、それぞれの文化であり、音楽の世界でこの世界水準の文化の多様性に接することができるのが、PMF の国際性でもある。

1-2-2　教育

そうした国際性を「教育」として実施するというのは、直接的にはプロを目指す若手音楽家に対する教育ではあるが、バーンスタインも述べているとおり、それは単に演奏技術の向上に留まるものではなく、全人格的な高みを目指すものでなければならない。その意味で指導者とアカデミー生とは一方的関係ではなく、教える者と教えられるものがたがいに敬意を払いながら、ともに新たな世界を発見し、そのなかで各々の可能性の実現を目指すものである。アカデミー生は指導者の圧倒的な音楽性とそれに裏打ちされた人間性に惹かれ、いつかはその高みへと自身も上り詰めたいと切磋琢磨する。指導者は若い音楽家の成長を見つめ、彼らを育成することの意義を学び、自らが世界の音楽界のなかで果たすべき役割を改めて確認する機会をえる。また演奏者と聴衆との関

係も教育的で相互的である。聴衆は聴く楽しみを教えられ、逆に演奏者は好ましい演奏とはなにかを聴衆から教えられる。音楽は音楽家のためばかりにあるのではなく、私たちのためにある。音楽家の独りよがりに終わることなく、その作品が私たちの生と深く結びつき、共感的な世界を作り出すこと、それが「教育」の目的である。

1-2-3　祝祭

そしてその共感的世界が実現する時、そこに「祝祭」が立ち現れる。祝祭（フェスティバル）とは共同体の「祈り（希求、感謝、誇り、連帯感の表明)」のかたちである。ここでの共同体とは、PMF に関わる全ての人々であり、アカデミー生・教授陣はもちろんのこと、修了生、運営に関わるスタッフや様々なサポートを担う人々、さらには演奏会に足を運ぶ聴衆や、アカデミー生を温かく見守る全ての人々から構成される PMF コミュニティである。この共同体の成員の能動的な参加によって、祝祭は成立する。そして何よりも既にこの共同体の成員と見なされている人たちはもちろんのこと、これまで共同体と無縁だと思い込んでいた人たちの能動的参加を促すことが大変重要である。そのためには、華やかさ、賑やかさ、喜ばしさ、楽しさ、誇らしさといった感情を生み出す、さまざまな演出が必要であるし、コミュニティに属しているひとりひとりの人となりが身近に感じられる工夫、演奏者と聴衆とが実際に触れあうことのできる機会の設定、また市民参加型のプログラムなども有効である。

1-2-4　国際教育音楽祭としてのクオリティの維持

以上、3 点を PMF の特性として挙げることができるが、これらは互いに連関しあうものでなければならない。世界中から選抜された若い音楽家たちが、世界水準の教育環境のなかで互いに切磋琢磨し、その成果を華やかな演奏会として披露する。聴衆は PMF に参加することを楽しみ、若い音楽家たちを応援し、彼らが世界で活躍することを我がこととして歓ぶ。彼らは PMF で学んだことが自らの成長にとって決定的に重要であったことを自覚し、やがて今度は指導者として札幌に戻ってくる。こうした好循環のなかで PMF の、そして札幌のステイタスが向上してゆく。

ただこうした理想的なあり方の想定は余りに楽観的すぎるかもしれない。現実を見据えれば、特に教育と祝祭の乖離、音楽家が求めるものと聴衆が求めるもののすれ違い、その結果もたらされる PMF に対する無関心という事態は大いに危惧されるところである。そうした事態を回避する手立ては容易ではないが、第 3 章で今後想定される課題とその解決の方向性を示した。

だが理想的な好循環をもたらすために何より重要なのは、音楽祭としてのクオリティを維持することである。先にも述べたとおり、優れた演奏とは、そこに参加する人々のあいだに共感的世界を生み出すものである。たとえまだプロの演奏家として独り立ちしていない者たちによる演奏ではあっても、また聴衆にとって必ずしもポピュラーな楽曲でなくても、それを契機に音楽家と聴衆のあいだに、また社会のなかに好循環をもたらすことを担保するのは、共感的世界の創造という音楽祭のクオリティである。

1-3　PMF の使命（ミッション）

以上を踏まえて、PMF の使命（ミッション）として次の 3 点を挙げることにする。

(A.)　教育のために

世界の才能ある若者に分け隔てなく最高水準のオーケストラスタディの機会を提供し、次世代を担う真のプロフェッショナル音楽家を輩出することで世界の音楽芸術に貢献することが第一に掲げられるべきミッションである。そして、このことは同時に、参加するアカデミー生に、PMF での学びを基にクラシック音楽の伝統と革新の中心にいて世界を舞台に活躍することを目指し、そのことを通して卓越した学びの場としての評価を PMF に還元することを求めることでもある。それは PMF の発展に向けた循環を創りだし、ミッションを高い次元で達成することにつながる。

(B.)　祝祭のために

札幌市民、北海道民のみならず、国内外の聴衆に最高のクラシック音楽を届けることが、祝祭としての PMF のミッションである。その上で、PMF を目指して多様な人々が集う場を作り出し、喜びを分かち合い、PMF コミュニティを構成する人々が能動的に参画する場を提供することで、祝祭をより華やかに、楽しいものにする。

(C.)　音楽のあふれるまちにするために

クラシック音楽に触れる機会が少なかった、あるいは持たなかった人たち、特に子どもたちに音楽の楽しさに触れる機会を提供すること、コアなファンを越えて幅広い聴衆にクラシック音楽を届け、まちを音楽で満たすことを PMF のミッションとする。一連の活動を通じてクラシック音楽の幅広い支持層を創出する。そして、PMF コミュニティ、特に札幌市民が誇りに思うことが出来るような成果を生み出し続けることを通して、豊かな市民生活の醸成に資する。

そしてこれらのミッションはバーンスタインの理念、「平和のための音楽祭」、「音楽を通じて実現する平和」と切り離されることがあってはならない。すべてはバーンスタインの理念を現実化することが PMF の使命なのである。そして、バーンスタインの理念の実現を願う世界のすべての人たちが、PMF コミュニティの住人であり、PMF はこの住人をひとりでも増やすことを究極のミッションとする。

第２章　PMF30 年の実績

第 2 章ではこれまでのパシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌（PMF）の実績を実証可能なデータとアンケート調査をもとに検証し、第 1 章で掲げた PMF のミッションを実現するための諸課題およびその解決の方向性を検討するための材料とする。

２-１　PMF の 30 年を振り返る

２-１-１　数字で見る PMF の 30 年

PMF は、1990 年の第 1 回から 30 年を経て、延べ 3,607 名の若手音楽家を世界のクラシック音楽界に送り出してきた。バーンスタインが創設あるいは発展に深くかかわった３つの教育音楽祭のなかでも、PMF は世界的にユニークな国際教育音楽祭として認められるまでになり、同時に国内有数のクラシック音楽フェスティバルとして多くの聴衆に豊かな音楽の世界を届けてきた。30 年間の実績と成果を概観すると、継続して開催してきたことによる積み重ねの一端を知ることが出来る。

図表1　数字で見る PMF30 年間の実績

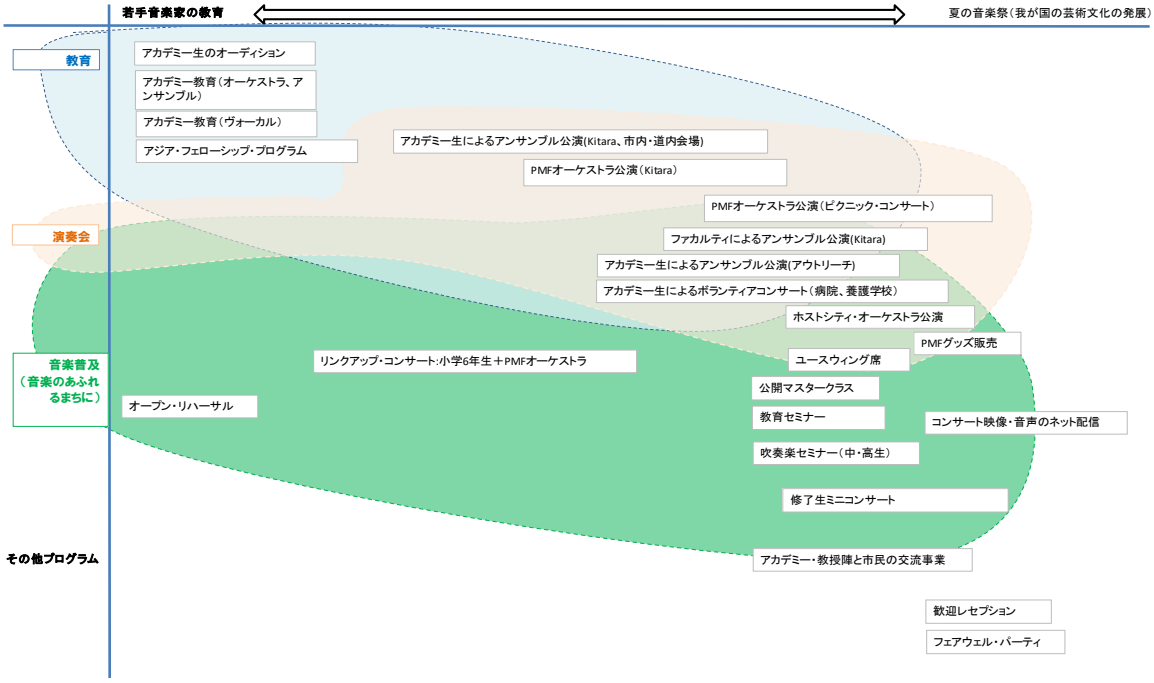
- アカデミー生参加者延べ人数：3,607人
  うち北海道・札幌出身者：98人
- アカデミー生参加国・地域：77ヵ国・地域
- オーディション受験者延べ人数：3万7,380人
  オーディション競争率：10.4倍（最高倍率は2014年、14.2倍）
- オーディション延べ開催都市数：2014年まで461都市
  2015年よりインターネットの専用サイト経由のネット・オーディション
- 教授陣：芸術監督含む指揮者延べ人数　135人
  楽器・声楽指導の教授陣延べ人数　800人
- アーティスト延べ人数：9,891人
  うち合唱延べ人数：1,245人
- 演奏会数：1,435件
- 演奏会総入場者数：約126万人
  うち道内：113万人、道外：13万人
- リンクアップ・コンサート：参加小学校60校、4,605名の6年生
- アウトリーチ・コンサート：175回

２-１-２　PMF の諸事業

PMF 組織委員会では企画および管理、運営の便宜上、事業の全体を教育事業、演奏会事業、音楽普及事業としているが、図表２に示す通り、それらは相互に連携し、分かち難く結びついている。2019 年第 30 回の PMF は、アカデミー生の教育プログラムを中核に、フェスティバルとしての多彩なプログラムで構成されていた。トレーニングの成果を提示し、厳しい耳を持つ聴衆の評価を受けることで教育プログラムは完結する。その意味で演奏会は教育活動にとって不可欠な要素であると同時に、フェスティバル

としての PMF の最も華やかな場である。音楽芸術を身近なものにする場であるリンクアップ・コンサートやボランティアコンサートは、アカデミー生に演奏家としての姿勢を問う場であり、PMF の理念とバーンスタインの理想を深く考える場でもある。街角で開催されるアウトリーチコンサートは札幌の街を音楽で満たし、クラシック音楽に親しむ人たちのすそ野を拡げる役割を担っている。さらに、マスタークラスやセミナーにより札幌・北海道在住の音楽を目指す若者に一流の音楽家の指導に触れる機会を提供している。クラシック音楽の聴衆の高齢化が指摘され、多様化する余暇活動の中でクラシック音楽が必ずしも“第一の選択”ではない現状の中で、クラシック音楽に触れる機会を提供し続けることは、音楽文化の発展に寄与し、フェスティバルの存続につながる重要な活動である。

図表2　PMF の全体見取り図（2019 年の公式プログラムに基づく）



2-1-3　PMF の認知度

PMF が毎夏札幌で開催されてきたことにより、市民の認知度は高く、実際に演奏会に足を運んだとする市民も多い。総務省統計局の社会生活基本調査によると、「音楽会等によるクラシック音楽の鑑賞」を行なった 10 歳以上の人口比率（行動者率）は札幌大都市圏で 2001 年以降 11.7%から 9.8%の間で推移しているが、札幌市の調査では、図表 3 の PMF を“知っている”の 53%からは PMF の開催がいわゆるクラシック音楽ファンを超えて広く市民に認知されている状況を確認できる。

さらに、札幌が誇れる文化芸術分野としてクラシックを挙げる市民が、他の分野と比較して圧倒的に多い。この結果は札幌交響楽団の活発な活動や、札幌・北海道の音楽関係者の地道な努力によるものであることは言を俟たない。しかし PMF の 30 年の実績

が市民による評価の後押しをしたであろうことを推測しても良いだろう。そして、このことは PMF が札幌の市民に受容され支持されてきていることを示唆していると見ることが出来るだろう。

図表3 あなたが知っている／行ったことがある札幌市の文化芸術イベントについて、あてはまる番号にいくつでも○を付けてください。(問8)

文化芸術イベント	2018年度 知っている	2018年度 行ったことがある	2017年度 知っている
n=	1,418	1,430	1,362
サッポロ・シティ・ジャズ	56.4	18.9	64.3
パシフィック・ミュージック・フェスティバル	53.3	20.4	59.3
市民ロビーコンサート	40.6	19.7	43.4
札幌市民芸術祭	35.6	11.0	40.5
札幌国際芸術祭	30.2	7.1	45.2
札幌演劇シーズン	12.9	4.5	13.7
さっぽろアートステージ	11.6	5.5	11.7
さっぽろユキテラス	5.5	2.1	5.1
知らない	14.8		
行ったことはない		51.9	
その他	1.0	0.9	2.6

出所)平成29年度、30年度文化芸術意識調査報告書、札幌市

図表4 あなたが、札幌市において他都市よりも優れていると考える文化芸術分野は何ですか。(MA)
(2011年度の設問)あなたが、札幌市が他都市よりも優れている、または他都市に誇れると思う文化芸術分野は何だと思いますか。

	2016年度	2015年度	2014年度	2011年度(郵送アンケート)	2011年度(文化芸術施設来場者)
n=	1,271	1,396	1,439	2,895	3,485
クラシック	23.3	24.9	24.9	23.4	34.1
ミュージカル	14.2	20.4	19.2	11.7	12.5
メディア芸術(映画、CG、アニメ、マンガ等)	13.1	11.5	14.9	3.8	6.0
ジャズ	11.6	15.3	13.3	11.6	11.3
彫刻	11.0	11.9	15.2	10.2	12.9
アニメ・映画音楽	7.6	5.9	6.7	1.9	3.9
演劇	6.8	7.3	7.6	5.6	10.8
工芸・陶芸	6.4	8.9	6.9	4.8	6.7
現代アート	6.1	7.4	−	−	−
ロック・ポップス等	5.0	5.5	5.0	5.6	6.4
特にない	41.2	39.7	37.5	41.4	20.7
その他	5.4	0.6	5.4	5.2	5.4
無回答	−	−	−	6.7	8.8

出所)平成23年度、26年度～28年度 文化芸術意識調査報告書、札幌市
注)上位10項目を抜粋

2-1-4　世界の音楽祭のなかでの PMF の位置づけ

世界では毎年 400 近い音楽祭が開催されているが、オーケストラスタディを主体として若手音楽家の教育を行う音楽祭は PMF を含めて世界で数か所しかない。図表 5 は代表的な教育音楽祭を比較したものである。ヨーロッパ 2 ヵ所、アメリカ 2 ヵ所と PMF を比較しているが、PMF の顕著な特徴はその国際性である。他の音楽祭では教授陣は概ね当該地域・国のオーケストラや音楽学校・音楽学部の教授陣が務めているが、PMF ではヨーロッパを代表するオーケストラの首席奏者クラスとアメリカの主要オーケストラの首席奏者クラスが参集し、多様な音楽観や奏法をアカデミー生に提示し彼らの音楽の幅を広げるよう促している。さらに、アカデミー生の選抜に際してのオーディションは世界各国で行われ、2015 年以降はネット・オーディションに移行して居住国・地域に関わりなく挑戦できるように配慮されている。その結果、後述するとおり参加す

るアカデミー生の出身地は世界に広がっている。他の音楽祭が開催国・地域の教授陣や学生が中心であるとの指摘に対して、PMF の国際性が際立っている。

さらに、欧州、米国の教育音楽祭の演奏会プログラムに注目すると、プログラムに記載の公演はヴェルビエが PMF とほぼ同規模だが、他は圧倒的に多く、客演アーティストの公演やホスト・オーケストラ（タングルウッドのボストン交響楽団）の公演が切れ目なく続き、その中に学生オーケストラの公演が組み込まれている。近年の PMF ではアカデミー生の公演を軸に教授陣の公演を配置するプログラム編成となっていて、教育音楽祭としては最もピュアな構成となっている。

図表5 世界の教育音楽祭比較

開催国	名称	創設年代	創設経緯	開催地	開催時期	演奏会
ドイツ	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭	1986 年創設	ピアニストのユストゥス・フランツ（Justus Franz）たちが中心になって創設された。翌 1987 年、レナード・バーンスタインにより、若い演奏家の育成のためのオーケストラ・アカデミーが設立された。	ドイツ、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州を中心に北ドイツおよびデンマーク南部の都市、地区で演奏会を開催	毎年 7 月上旬から 8 月末 2020 年は 7 月 4 日～8 月 31 日	客演アーティスト、オーケストラの公演を中心に 236 公演。学生オーケストラおよびアンサンブル公演は 17 公演。
スイス	ヴェルビエ音楽祭	1994 年	音楽プロデューサーの Martin T:son Engstroem が 1994 年に創設した音楽祭。2000 年に教育活動として Verbier Festival Orchestra を設立、2004 年には Verbier Festival Chamber Orchestra を、また 2013 年に Verbier Festival Junior Orchestra を設立。.音楽祭のミッションは熟練のマスターたちと若い音楽家の交流を実現するコミュニティを創り出すこと。	Verbier, Switzerland	夏季 2 週間 2020 年は 7 月 17 日～8 月 2 日 VFO：6 月 30 日～8 月 4 日	客演アーティストによるリサイタルと、Verbier Festival Orchestra の演奏会で構成されるプログラムが期間中、連日開催される。 2020 年は全 81 公演中 20 公演が VFO および他のコースの演奏会。
アメリカ	タングルウッド音楽祭	1934 年に避暑客の有志が NY フィルのメンバーを招いて演奏会を開いたのが端緒。	1936 年に Boston 交響楽団によるコンサートがスタート、以来 Boston の夏の演奏会場として定着。1940 年に Tanglewood Music Center の前身が活動開始。	マサチューセッツ州西部の Berkshire 郡	2020 年 Tanglewood season: 6 月 19 日～8 月 27 日	期間中 BSO の演奏会をはじめとする多彩な演奏会がほぼ毎日開催される。その中に TMC および BU Tanglewood Institute の演奏会が埋め込まれている。 155 公演中 32 公演がフェローによる公演。
アメリカ	アスペン音楽祭	1949 年	ゲーテ生誕 200 年を記念する 2 週間の音楽とフォーラムのイベントからスタート。翌年、参加した音楽家が学生を連れて集り、AMFS の基礎が出来た。	コロラド州アスペン市	2020 年 7 月 2 日～8 月 23 日	2020 年プログラムでは 243 公演。うち 123 公演が学生オーケストラおよびアンサンブル演奏会。
日本	パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌	1990 年	レナード・バーンスタインの提唱により 1990 年に札幌で創設。若手音楽家の教育を主眼に構想された。	札幌	毎年 7 月初から 8 月初までの 1 カ月。 2020 年は 7 月 10 日～8 月 3 日	PMF オーケストラ演奏会、ファカルティの演奏会、アカデミー生による小編成演奏会。 70 公演中 29 公演がアカデミー生の公演。

出所）各音楽祭の公式インターネットサイトより 2020 年 2 月に整理。
注）演奏会日程、教育内容や演奏会プログラムは 2020 年 2 月時点で発表されていたものに基づく整理。ただし、PMF は 2019 年のプログラムを参照した。

オーケストラスタディ	年齢制限	オーディション	教授陣	その他の教育プログラム	参加費
毎年、Festival Orchestra of the Schleswig-Holstein Musik Festival がオーディションに合格した若手音楽家により組成される。2004 年より Christoph Eschenbach が首席指揮者を務める。	26 歳以下	2020 年向けオーディションは欧州、北米、中南米、アジア 30 都市で実施。アジアでは東京、台北、ソウル、北京の 4 都市。約 1,500 人が受験し、約 120 名が選抜される。	ドイツのオーケストラの首席奏者クラス、欧州の音楽学校の教授陣	the University of Music Lübeck でマスタークラスが開催され、約 150 名の参加がある。 The Festival Choir of the Schleswig-Holstein Musik Festival はアマチュアにも開かれている。	オーディション合格者には旅費、宿泊費、受講料に充当するグラントが与えられる。ただし、オーディションの参加には受験料 50 ユーロ（南米の受験者は 15 ユーロ）が必要。
The Verbier Festival Orchestra（VFO）。VFO は 97 名の若い音楽家で構成され、毎年約半数が交代する。オーディションに合格すると、2 年間 VFO に参加できる。	オーケストラ：18～28 歳 指揮コース：20～35 歳	ライブオーディションと録画による審査	VFO の指導は NY のメトロポリタンオペラオーケストラの首席奏者。 VJFO の教授陣には VFO 修了生で各地のオーケストラで活動中の音楽家が多く含まれる。	オーケストラスタディに加えて、ソリスト、室内楽、歌手、指揮者のトレーニングコースも併設。 また、15～18 歳の学生を対象とした Verbier Festival Junior Orchestra (VJFO)も併設。	
Tanglewood Music Center として教育プログラムが提供される。楽器奏者はオーケストラスタディを中心に、室内楽、マスタークラスが用意されている。	全ての応募者は高卒以上、学部卒ないし卒業見込み ヴォーカル：20～35 歳 作曲・指揮・司書：18 歳以上 高卒前の学生に対しては Boston 大が開催する Boston U. Tanglewood Institute が受け入れる。	オーケストラ：弦楽器：米国内 9 都市；木管・金管：8 都市；ハープ：ボストンのみ；打楽器：4 都市 ビデオオーディションも実施 ヴォーカル：5 都市 ピアノ：5 都市 作曲：楽譜および録音 指揮：指揮の様子を録画したビデオ	ボストン交響楽団の各パートの首席クラス	ヴォーカル、作曲、指揮、ピアノの各コースがあり、加えてオーケストラ・ライブラリアンのコースが提供されている。	登録料として$250。 朝食、夕食、宿泊は無料で提供される。往復の旅費および滞在期間中の昼食その他の個人的支出は自己負担。 TMC のプログラムは寄付によって支えられており、そのために受講料の負担が免除されている。参加者は寄付者の名前がついたフェローシップが割り当てられる。また、オーディションの参加には受験料$75 が必要。
5 つのオーケストラを編成、17 歳以上の学生はオーケストラに向けたオーディションを受けることが必須。17 歳以下あるいは経験の少ない学生はオーケストラへの参加が制限されることがある。	特に年齢の条件は無く、10 歳～37 歳、平均 22 歳。 コース全体で 650 名以上の学生が参加。	推薦状が必要。	アメリカの主要オーケストラおよび音楽学校、音楽学部の教授がファカルティを構成。	オペラ、室内楽、作曲、ピアノ、ヴォーカル、クラシックギター	受講料 $4,750、宿泊その他 $5,145 計$9,895。 海外からの参加者は奨学金を申請できる。 別に応募時に$25～$125 のアプリケーションフィーが必要。
ネット・オーディションで選抜されたアカデミー生が PMF オーケストラを編成する。教授陣の指導を受けつつ、教授陣とともに演奏する。	18～29 歳、かつ 3 回までの参加	専用インターネットサイトを経由するネットオーディション。	前半：ウィーン、ベルリンの各パート首席奏者クラス 後半：米国主要オケの首席奏者クラス	オーケストラスタディが中心だが、ヴォーカル、作曲といったコースが設定されることがある。	個人的支出を除いて、経済的負担は無い。ただし、オーディション参加にはサイト利用料として$30 の負担あり。

2-1-5　PMF に対する参加者の評価

PMF への参加によってどのような成果がもたらされたのだろうか。教授陣とアカデミー生による評価を確認しておく。

教授陣による評価（インタビュー調査結果より抜粋）

- アメリカ式とヨーロッパ式の両方を学べる機会があるのは素晴らしい。技術的な部分だけでなく、音の概念もかなり違うので、学生たちは全く違うアプローチを見ることができる。
- 夏に開催されるフェスティバルの中では、PMF は、一番ではないとしても、タングルウッドやスイスのヴェルビエと同等のレベル。これらがトップスリーの音楽祭だと思う。
- 長年の活動によって（PMF は）最も重要な若手音楽家の教育フェスティバルの一つとなっている。世界の主要なオーケストラに PMF の修了生が在籍していることがその証。国際的な音楽シーンでは極めて重要な役割を担っている。
- PMF ではアメリカやヨーロッパなど様々な地域から教授陣が参加し、学生たちは本当に多様な音楽観や、演奏技術を体験することになるのが素晴らしい。

修了生による評価（インタビュー調査結果より抜粋）

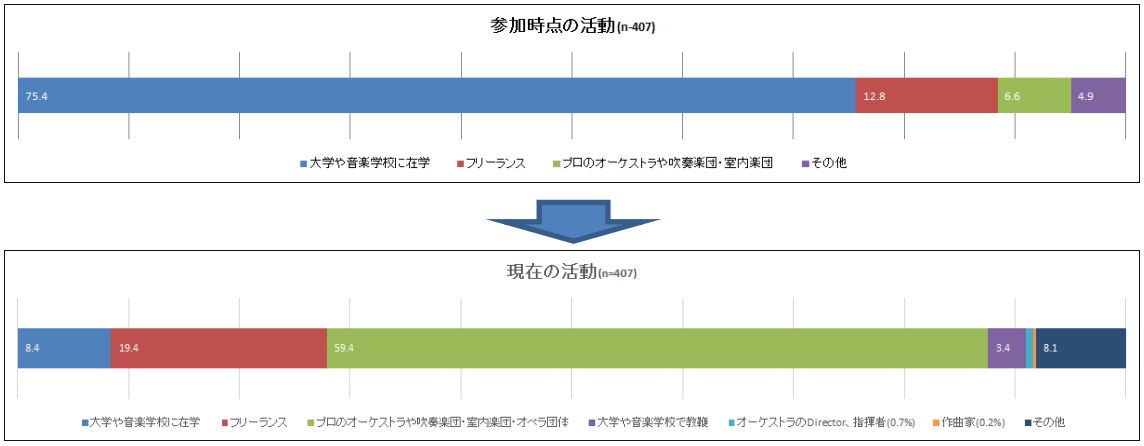
- PMF の教授陣は特別。ヨーロッパの教授陣、アメリカの教授陣で全く違うことを言っていても、ともにある水準を突き抜けている。違っているけど、両方素晴らしい、違うけど反対じゃない、と、皆が感じ取っている。彼らと一緒に演奏して、世界レベルのピアニッシモ、世界レベルのレガードを経験すると、それは一生残る。
- 同世代の世界中の人たちと 1 カ月間一緒にいて、いろんなことを話したりするという刺激もかなり大きかった。自分の世界が広がるような感じがして、すごく有意義だった。
- PMF オーケストラのクオリティは信じられないほど素晴らしい。世界のトップレベルのオーケストラと同等、時にはそれよりも優れていることがある。それは、皆、1 カ月間ここに滞在して、世界を変えたいと思う意欲があるから。様々な国々からやってきて、何か変化を起こさなければという気持ちが、そのような大きな力を生んでいる。

2-1-6　アンケート調査による修了生の現況

PMF の直接的な成果として、参加したアカデミー生のキャリア形成がある。音楽家としての道を歩めているかどうか、別の観点では世界のクラシック音楽界に優秀な人材の輩出という形で貢献できているかである。修了生の追跡調査によると、アカデミー生として PMF に参加した若手音楽家は、現在プロの音楽家として活動している。参加時点では 3／4 は音楽を学ぶ学生であったが、現在は 90%を超える修了生がクラシッ

ク音楽に関わる活動に就いている。演奏家としての活動が主だが、オーケストラのディレクターや指揮者、作曲家として活動しているものもいる。

図表 6　修了生のキャリア形成



出所）修了生アンケート

オーケストラメンバーとして活動する修了生が所属するオーケストラは、全世界で 165 を数えるが、その中でコンサートマスターないしは首席奏者を務めているオーケストラは、世界各国で 100 を超える。世界の主要なオーケストラに PMF の修了生が在籍する、という指摘は決して誇張ではない。

図表7　PMF 修了生がコンサートマスター、首席・副首席奏者として在籍しているオーケストラ（抜粋）

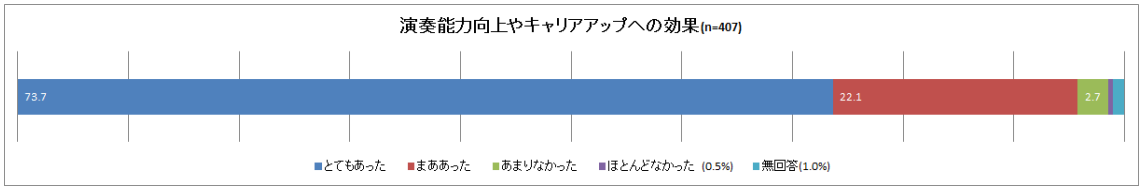
日本	大阪交響楽団	関西フィルハーモニー管弦楽団	群馬交響楽団
	新日本フィルハーモニー交響楽団	東京交響楽団	東京フィルハーモニー交響楽団
	名古屋フィルハーモニー交響楽団	兵庫芸術文化センター管弦楽団	
アメリカ	コロラド交響楽団	サンフランシスコ交響楽団	サンフランシスコ・バレエ管弦楽団
	シアトル交響楽団	セント・ルイス交響楽団	ダラス交響楽団
	デトロイト交響楽団	ニューヨーク・シティ・バレエ管弦楽団	ニューヨーク・フィルハーモニック
	ノースカロライナ交響楽団	パシフィック交響楽団	ボストン交響楽団
	ヒューストン交響楽団	ボルティモア交響楽団	メトロポリタン歌劇場管弦楽団
	ロチェスター・フィルハーモニー管弦楽団	ロサンゼルス・フィルハーモニック	他18団体
ドイツ	ケルンWDR交響楽団	デュッセルドルフ交響楽団	ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団
	バイエルン国立管弦楽団	ハンブルク・フィルハーモニカー	ベルリン・ドイツ・オペラ
	ベルリン・ドイツ交響楽団	ベルリンフィルカラヤンアカデミー	
	ラインラント＝プファルツ州立フィルハーモニー管弦楽団		他11団体
英国	BBCフィルハーモニック	ハレ管弦楽団	フィルハーモニア管弦楽団
	ロンドン交響楽団	ロンドンフィルハーモニー	
アジア各国	国家大劇院管弦楽団	上海交響楽団	Suzhou Symphony Orchestra
	ソウル市立交響楽団	韓国交響楽団	フィルハーモニア台湾
	Evergreen Symphony Orchestra (Taiwan)	香港シンフォニエッタ	Singapore Chinese Orchestra
	マニラ交響楽団	Sun Symphony Orchestra (Vietnam)	
中南米	Orquesta Sinfónica Nacional de Chile	コロンビア国立交響楽団	コスタリカ国立交響楽団
	Orquesta Filarmónica de Jalisco (Mexico)		

出所）修了生アンケート

PMF に対する修了生の直接の評価は、キャリアアップに効果があったとする回答が 95%を超えていることに示されているが、さらにアンケート回答者のほぼ全員がプロを目指す若手音楽家に、PMF への参加を勧めるとしていることに高い評価が示されている。

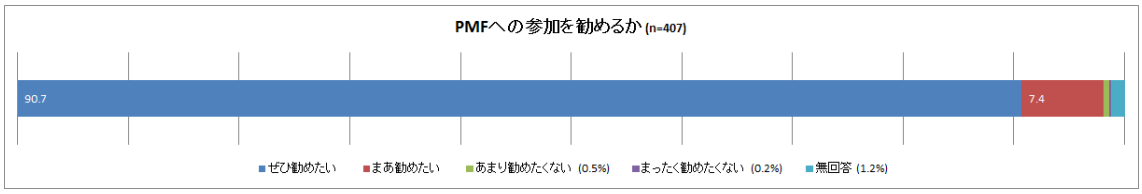
図表 8 修了生による PMF 参加の評価

・参加経験の評価



・参加の奨励

「あなたはプロを目指す若手音楽家に、PMF への参加を勧めますか。」



出所）修了生アンケート

2-1-7　PMF の経済効果

PMF のもたらす様々な効果の一つとして、最後に地元地域への経済波及効果について触れておく。経済的な効果を目的に PMF を開催しているわけではないが、多くの人が参集し 1 か月にわたる様々な活動を繰り広げることで、地元の経済活動にプラスの影響を与えている。PMF の継続的な実施を考える際に、地元経済にもたらされる効果を確認しておくことは重要である。開催地として一方的な経済的負担を負っていくわけではなく、地域全体として豊かな音楽芸術の享受に加えて、さらに経済という現実的な側面で波及効果がある。PMF2019 では、来場者による消費や開催経費から、7.9 億円の波及効果（地元シンクタンクへの組織委員会委託調査、生産波及効果額）が生み出されたことが確認されている。2019 年は 30 回記念の年であり、特別なコンサートが実施されるなど道外からの来場者を例年以上に引き付ける内容であったことから、2018 年の 5.1 億円と比較しても大幅に伸びている。2018 年を平年とすると、毎年少なくとも同程度の経済効果があることが想定される。この額は札幌市における経済活動全体の規模と比較すると、決して大きな額ではない。しかし、PMF のような文化芸術に関わる事業にも一定の経済波及効果が確かにあることを認識しておくことは、今後の継続開催に向けた努力を下支えすることになる。経済という現実的な側面で効果が地元経済に広く行き渡ることで、継続開催の基盤の一つがより確実なものになる。その意味で、経済波及効果をより確実で大きなものにしていくような観光産業をはじめとした様々な事業者との連携に留意しておくことも必要であろう。

2-2　過去 2 回の将来構想を振り返る

PMF では過去 2 回、ほぼ 10 年ごとにそれまでの実績成果を振り返り、直面する課題を確認した上でその後の展開の道筋を構想してきた。

2-2-1　「PMF2000 年構想」（1999 年 4 月）

2000 年構想では「世界トップレベルのオーケストラスタディを軸にしたアジアでの国際教育音楽祭」を目指し、教育部門とトップアーティストによる演奏会部門の 2 本柱で構成する方向性を確認し、その後の約 10 年の開催の指針とした。現時点から振り返ると、この構想が目指した最も重要な改革は、運営体制にかかわる諸課題の解決であった。第 1 回以来企画はニューヨークに設立された PMF 財団が担い、東京に置かれた㈱PMF センターに開催実務を委託する体制であったが、創設後 10 年を経て、組織運営の自主性と企画の内部化が議論された。ここに示された方向性に基づき、任意団体であったパシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会は 2002 年に財団法人化され、外部専門家も交えた企画会議と体制強化された組織委員会が企画運営を担っていく形となった。この新体制のもと、プログラム面でも新機軸が打ち出され、アウトリーチコンサートが開始され、聴講生制度や教育セミナーといった市民との交流や啓もう活動にも力が注がれるようになり、高いレベルの教育活動とともに、札幌の市民に積極的に近づいていこうとの意思が明確になった。

芸術監督の重要性が指摘されたが、2003～2009 年の間、芸術監督が不在だったが、2010～12 年の間ファビオ・ルイジが、2015 年からはワレリー・ゲルギエフが芸術監督に就任して、アカデミー生を強力に牽引した。

2-2-2　「PMF 新構想／新たなステージへ」（2012 年 3 月）

2012 年の新構想では財政面での課題と創設理念を見失いかけているとの危機感から、時代の状況に対応した PMF の在り方を模索した。創設の理念に立ち返り、PMF のあるべき姿を再確認し、安定的に開催が可能になるような財政基盤を考えようとした。しかし、2014 年の第 25 回をもって第 1 回以来中心になって PMF を支え続けたグランド・パートナーズの支援に区切りが付くことになった。25 年の長きにわたり支援を続けたグランド・パートナーズの姿勢に深甚なる謝意と尊敬の念を表しておきたい。ここで、PMF の開催運営は大きな転機を迎えた。その後、関係者の多大な努力により支援企業が 2014 年の 35 社から 2019 年には 105 社と格段に増え、また様々な工夫によりこの困難な問題を乗り越え第 30 回を無事に終えることができた。財政的な困難に直面しながらも、プログラム面では新構想で示された新たな企画が実現していった。フェスティバルを華やかな装いとする GALA コンサートが 2012 年より始まり、同時に教授陣やアカデミー生のアンサンブル演奏会回数が増え、街中を音楽で満たすという理想に一歩近づいている。教育プログラム関連では、2015 年からオーディションが専用サ

イトを利用したネット・オーディションに移行し、挑戦しようとする若手音楽家の地理的制約を無くした。また、教授陣は前半が PMF ヨーロッパ、後半が PMF アメリカという体制が定着し、ユニークな教育音楽祭としての PMF の評価を確固たるものにした。また、アジアからの参加を促していく方策として 2012 年、13 年に「アジア・フレンドシップ・アカデミー」を、2017 年からは「アジア・フェローシップ・プログラム」を実施している。さらに、小学 6 年生を対象としたリンクアップ・コンサートを 2013 年より開始した。

これらの一連の動きは、PMF を与えられたものから自分たちのものにしていくプロセスであったと考えることはできないだろうか。関係した多くの人たちの多大な努力が必要であったが、それがもたらした果実は大きい。この努力の成果の一端として、2018 年の北海道遺産認定があり、2019 年の東京公演への上皇上皇后両陛下のご来臨が実現したと言えるだろう。これからも不断の、そして厳しい努力を要求されるであろうが、それが札幌でなければならない理由を積み上げていくことになる。

第３章　PMF のミッションの遂行状況と今後の課題解決へ向けて

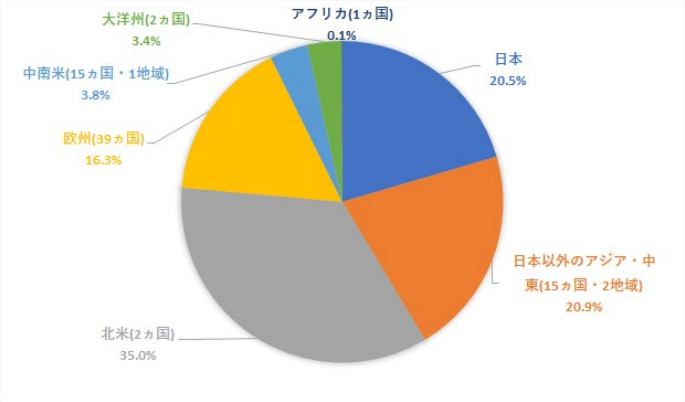
3-1　若手音楽家の教育の場としての PMF

以下、第 1 章で掲げたパシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌（PMF）の 3 つのミッションとの関わりで、PMF の特徴および実績、また現状の課題とその解決の方向について順次提示してゆく。短期的また長期的に取り組むべき具体的方策については、今後、組織委員会と札幌市で行動計画が策定され、鋭意取り組まれることを望む。

3-1-1　国際教育音楽祭としての特徴と実績

国際教育音楽祭としての PMF の特徴として第一に挙げなければならないのは、教授陣とアカデミー生の国際性である。シュレスヴィヒ＝ホルスタインやヴェルビエがヨーロッパ中心、タングルウッドが北米中心と言われるのに対して、PMF は文字通り世界中から応募があり、厳しい選抜をクリアした若手音楽家が世界中から札幌に参集している。30 年を総括すると、日本を含むアジア・中東からの参加者が 41%、北米が 35%、欧州が 16%となっている。10 年毎に参加構成を見ると、初期に比べアジアからの参加が拡大し、北米・欧州・アジアの三地域を中心としたグローバルな構成となり、世界各国からの参加が実現できている。

図表 9 地域別アカデミー生参加割合（1990～2019）



図表10 アカデミー生の出身地構成

	実　数			構 成 比		
	1990～1999	2000～2009	2010～2019	1990～1999	2000～2009	2010～2019
アジア・中東（15カ国・2地域）	496	566	431	36.7%	46.8%	41.2%
大洋州（2カ国）	65	41	18	4.8%	3.4%	1.7%
北米（2カ国）	529	380	354	39.2%	31.4%	33.8%
中南米（15カ国・1地域）	70	34	34	5.2%	2.8%	3.2%
欧州（39カ国）	188	189	210	13.9%	15.6%	20.1%
アフリカ（1カ国）	2	0	0	0.1%	0.0%	0.0%
計	1,350	1,210	1,047			

このような国際性の実現に寄与している要因の一つとして、旅費滞在費・受講料の支給という手厚い支援を第一回から継続していることがある。経済的理由で参加を断念することが無いように、全ての優秀な、可能性のある若手音楽家に機会を与えることが出来ている。

異文化との衝突が新たな価値を生み、音楽家としての輝きを増すことにつながるとすると、PMF は世界に類例のないユニークな教育音楽祭ということが出来る。

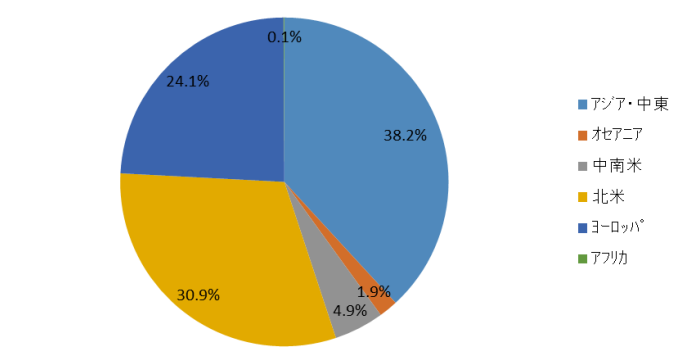
アカデミー生はオーディションにより、PMF の教授陣を中心とした審査員による審査で選ばれている。2014 年までは世界の主要都市でオーディションを実施していたが、2015 年からはインターネットの専用サイトを利用したネット・オーディションに移行した。この結果、受験者数は維持しつつ、受験者の国籍は広がっている。2015 年以降、受験者の出身国は増加傾向にある。世界の教育音楽祭でネット・オーディションだけで参加者を選抜しているものは PMF 以外にはなく、応募者に対する公平な機会提供という観点で、PMF はより徹底した対応を行っている。

図表11 ネット・オーディションによる応募者の拡がり

	2010～2014	2015～2019
5年間に一人でも応募者があった国・地域	73	83
当該5年間のうち3年以上で、かつ、5名以上の応募があった国・地域	47	54

2015以降に初参加：15カ国：インド、イラン、ミャンマー、シリア・アラブ共和国、ドミニカ共和国、ホンジュラス、プエルトリコ、ウルグアイ、アルバニア、アルメニア、アゼルバイジャン、エストニア、ルクセンブルグ、マケドニア、トゥルクメニスタン

図表12 2019 年オーディション受験者の地域別構成

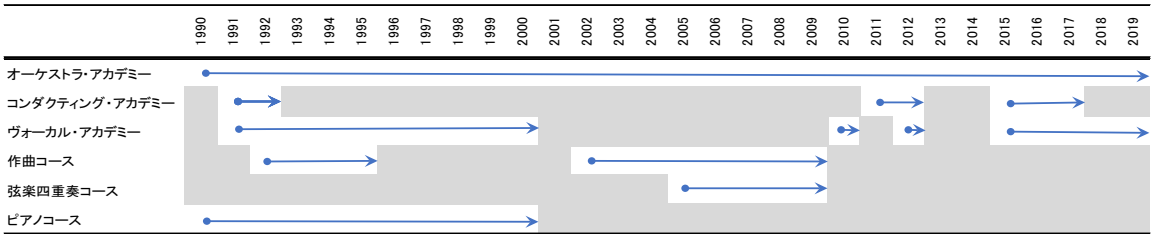


教育プログラムは、オーケストラスタディを核に過去 30 年の間、ヴォーカル、指揮、作曲、弦楽四重奏、ピアノの各コースが提供されてきた。2019 年の第 30 回ではオーケストラとヴォーカルの二本立てで実施された。

オーケストラ・アカデミーの一環として様々な小編成のアンサンブルが課せられ、成果はアウトリーチをはじめとした PMF アカデミーコンサートで演奏された。

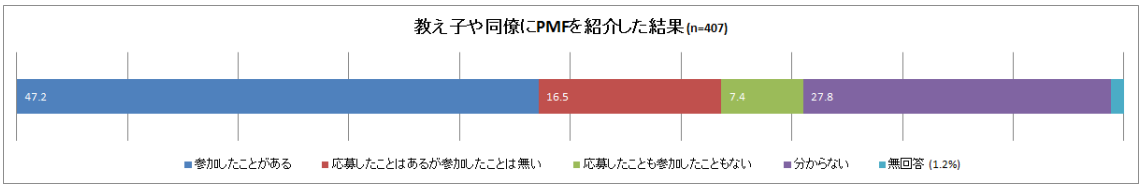
これまでの 30 回の中で、あるべき教育音楽祭の姿を模索し、様々な実験が行われてきたと見ることもできる。このプロセスの中で選択と集中が図られてきたと言うこともできる。

図表 13　教育プログラムの変遷



開催を重ねることで実現できたことの一つは、修了生が同僚や教え子に PMF への参加を促し、実際に参加するケースが確認できることである。修了生が次の世代のアカデミー生を生み出していく、未来に向けた循環が出来ている。そして、このことはプロを目指す若い音楽家の間で PMF の評判が定着していることを示している。

図表14　修了生による次世代への働きかけ



出所）修了生アンケート

教育プログラムに決定的な役割を果たすのが指導する指揮者と教授陣である。30 年の間、途中 9 年間を除いて世界を代表する指揮者が芸術監督に就いてきた。同時に毎年複数の指揮者が登場し、多様な演奏体験を提供してきた。

また、各パートにはヨーロッパの代表的なオーケストラの首席奏者とアメリカの代表的なオーケストラの首席奏者が教授陣を構成し、音楽に関するあらゆることが指導の対象であり、本番のステージで一緒に演奏することでアカデミー生には他に代えがたい経験を提供している。芸術監督をはじめとする指揮者陣と、特定のオーケストラに偏らない教授陣の貢献は大である。

図表15　芸術監督および指揮者

	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
芸術監督	2	2	1	2	2	2	2	2	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1
首席指揮者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	2	0	0	0	1	0	1	1	1	1	2
客演指揮者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	2	2	1	0	1	1	1	0	1	0	0	1	0
指揮者・アシスタントコンダクター	4	2	3	3	3	3	3	2	4	3	3	2	1	3	1	1	3	3	2	2	2	1	1	1	7	2	2	2	3	4

図表16　教授陣の構成

	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
PMF−ウィーン	0	13	13	14	14	14	12	13	13	14	14	14	16	15	17	15	15	15	13	13	0	0	0	0	0	0	5	6	6	6
PMF−ベルリン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	13	13	13	13	0	0	0	0	0	0	8	8	8	8
PMF−ヨーロッパ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	13	14	13	13	13	0	0	0	0
PMF−アメリカ	0	0	0	10	13	11	13	9	11	12	12	13	14	4	7	7	14	14	14	14	13	13	14	14	14	8	14	13	14	15
インターナショナルプリンシパルズ	0	0	0	0	0	0	4	0	3	4	2	2	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	13	13	24	27	25	29	22	27	30	28	29	30	20	25	28	42	42	40	40	26	26	28	27	27	21	27	27	28	29

注）PMF−アメリカにヒューストン・シンフォニー・チェンバー・プレイヤーズ（ヒューストン交響楽団首席奏者）とエムバイヤ・ブラスを含む

3-1-2　将来に向けての課題と解決方向

3-1-2-1　芸術監督、教授陣に関して

教育プログラムの構成は芸術監督の考えに基づくものであるべきで、複数年の任期を前提として一定のコンセプトの下に組み立てることが望ましい。そのためには、初期の企画検討段階から芸術監督の積極的な関与が必要であり、バーンスタインの理想を理解し、そのような関与に前向きな芸術監督の就任が望ましい。

また、芸術監督や招聘する指揮者とともにPMFのレベルを左右するのが教授陣である。30年が経過し、これからの10年、20年を展望するとき、ヨーロッパとアメリカの主要オーケストラの首席クラスという教授陣の編成に象徴される国際性・多様性を将来にわたって維持していくためには、広く日本を含む世界を視野に入れて次世代の教授陣候補の探索に継続して取り組む必要がある。

そして、時の経過とともにバーンスタインの薫陶を受けた人々が少なくなることは致し方ない。そうした時の流れを認識し、アカデミー生の指導に当たる教授陣にもPMFの基本理念とゴールの確認と共有を求めたい。

3-1-2-2　アカデミー生と教授陣の国際性

他の教育音楽祭と比較して、参加するアカデミー生と教授陣は多国籍、多文化、多言語の構成となっている。これは極めて重要な特徴であり、将来にわたって堅持するべきである。アカデミー生に対する手厚い支援は経済的状況のいかんに係らず才能がある若手音楽家に機会を提供することであり、PMFの理念の実現に向けての有用な手段となっている。アカデミー生に経済的負担を負わせないという良き伝統を今後も維持するために、広く世界に支援を求めるなど財政基盤の拡充に最大限の努力を払うべきである。

3-1-2-3　アジアで開催する国際教育音楽祭

PMFは音楽という共通の舞台の上での異文化交流の場で、多様性に根差した新たな音楽の創造の場であり続けることを目指すべきである。アジアで最大の国際教育音楽祭であり、アジアを代表する音楽祭としてのポジションは一定程度確立されているが、なお確固たるものとする努力を重ねていくべきである。

そのためにも競争的な環境を維持しつつ、アジア各国および世界の新興国出身者の参加を促していく必要がある。その一環としてアジア・フェローシップ・プログラムの継続・拡充と、プログラム参加者のオーディション挑戦を働き掛けていくことが重要である。その時、新興国からの挑戦に存在する様々なハンディキャップの克服への目配りや、国際基準のルールの啓蒙も国際教育音楽祭としてのPMFの役割と考えることができるだろう。

3-1-2-4　オーディション

教育機関としての質を確保するためには、参加するアカデミー生の質を維持向上する必要がある。ネット・オーディションはメリットばかりではなく、一定のデメリットやリスクもあることを理解し、オーディションの方法や選抜基準は不断に改善していかなくてはならない。

3-1-2-5　教育音楽祭としてのプログラム編成

アカデミー生に対する教育効果の観点から編成されるプログラムとフェスティバルとしての観点からのプログラム編成の両面がある。両者の間のバランスを常に念頭に置くことが望まれる。その上で、オーケストラスタディを核として有機的なコース設定が検討されることを望む。芸術監督の積極的な関与により、2〜3 年のタームで企画が構想されることが望ましい。

3-2　音楽祭（フェスティバル）としての PMF

3-2-1　フェスティバルとしての実績

フェスティバルとしての PMF の 30 年を通して、常にアカデミー生が主役であったことは特筆して確認しておくべきことである。特定のオーケストラや演奏団体の公演を中心にしたプログラムではなく、教授陣、アカデミー生ともに極めてインターナショナルで多様なバックグラウンドの演奏家が PMF オーケストラを構成し、一つの音楽を奏でることで PMF の音を作り出している。多様なバックグラウンドの若手音楽家が札幌に集い、毎年一期一会で一つのオーケストラとしての完成を目指し、聴衆はそれを目の当たりにする。これこそがフェスティバルとしての PMF の特徴であり、聴衆にとっての醍醐味である。

1990 年代は客演オーケストラやアーティストの演奏会が数多くプログラムに配置され、加えて、各国の伝統音楽や民族音楽を紹介する演奏会、現代音楽にフォーカスしたパシフィック・サウンディングが実施されていた。アカデミー生に多文化の多様な音楽芸術に触れる機会を与え、また同時代を生きる作曲家とともに音楽を創る経験を得る機会であるとともに、このようなプログラム構成とすることでフェスティバルの華やかさを創り出していた。しかし、徐々にアカデミー生と教授陣を中心としたプログラムという基本線が確立し、その中で多彩なプログラムが実現している。近年では PMF オーケストラとしての演奏に加えて小編成のアンサンブルを市内各所や道内市町で数多く演奏している。

図表17　音楽祭（フェスティバル）の全容

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
オープニングセレモニー・コンサート／ウェルカム・コンサート	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
PMFオーケストラ	3	5	5	5	5	8	5	6	5	6	6	5	7	5	5	6	5	5	5	4	4	5	5	10	5	7	6	4	5
PMF-GALAコンサート	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1
ピクニック・コンサート	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
PMFオーケストラ道外公演	1	2	2	2	3	2	3	2	1	1	2	3	3	2	3	3	3	2	2	3	3	4	3	3	2	1	2	2	2
PMFアンサンブル	7	3	8	7	6	7	7	7	4	7	4	3	4	5	13	8	12	14	13	9	13	11	10	14	7	13	11	10	9
PMFアンサンブル道外公演	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
街頭コンサート	0	0	0	0	1	1	1	1	1	2	2	1	3	1	2	2	2	1	2	3	8	9	7	6	7	6	7	6	13
アウトリーチコンサート	0	0	0	0	1	1	1	1	2	2	2	1	3	3	8	7	9	9	11	13	17	11	10	10	8	9	9	8	19
声楽コンサート	6	5	4	4	4	3	3	2	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(4)	0	1(3)	0	0	(2)	1(2)	(2)	(2)	(2)
声楽コンサート（PMFアカデミー・シンガー）道外公演	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
PMF弦楽四重奏コース演奏会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	4	3	3(3)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
PMFコンダクティング・アカデミー演奏会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	(1)	0	1	(1)	0	0	1(1)	(1)	(1)	0	0
青少年のための音楽会/リンクアップ・コンサート	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0	1	1	■	■	■	■	■	■	■	■	1■	1	1	1	1	1	1
修了生オーケストラ・アンサンブル	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	6	4	0	0	1	0	0	0	0	2
ファカルティ演奏会	5	9	7	8	7	9	5	7	10	9	11	11	6	7	8	8	7	7	7	7	6	6	3	8	5	5	6	5	7
札幌交響楽団	1	5	3	2	1	1	1	1	1	2	2	2	3	2	1	1	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1
客演オーケストラ	4	7	5	6	4	1	4	3	1	3	2	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
客演アーティスト・リサイタル	6	4	2	1	2	5	5	3	4	2	0	1	1	0	3	1	2	2	2	1	1	4	2	0	0	0	0	0	1
パシフィック・サウンディング	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伝統音楽・民族音楽演奏会	2	2	2	1	1	2	1	1	2	3	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
フェスティバル・イベント*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○	0	0	0	○	○
公開レッスン・マスタークラス	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	5
聴講生制度・オープンリハーサル	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
音楽教室・教育セミナー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
クリニック・セミナー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○	○	○	○	○	○	○
訪問リハーサル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○	○	○	○	○	○
楽器公開講座・（ミニ）トークコンサート	22	24	22	24	20	25	18	10	8	13	16	16	6	10	5	5	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トークセッション														○						○	○	○		○	○	○	○	○	○
ボランティアコンサート	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
映像・録音・ライブビューイング	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2
楽器デモンストレーション・楽器体験イベント																												○	○
北海道大学との連携授業																									○	○	○		

＊バーンスタイン・メモリアル・フェスタ、シティジャズとのコラボ、ストリート・ピアノ

注）数字は演奏会数、開催回数、○印は実施を示す。他の公演に組み込まれて開催された場合は、カッコつき数字または■で示す。

これらの演奏会やその他のプログラムに 30 年で約 126 万人の来場があった。年平均 4 万 2 千人ほどだが、近年は公演数の関係により 4 万人弱で推移している。2014 年から実施している来場者調査によると、毎年 20%ほどの来場者が初めて来場と回答し、この比率が安定的に推移していることから、毎年新たに PMF の演奏に耳を傾ける人たちを生み出していることも成果の一つとして留意しておきたい。

フェスティバルとして重要な活動は、コンサートホールから外に飛び出し札幌の街を音楽で満たすことである。街頭での演奏は多くの市民にクラシック音楽に接する機会を提供し、普段クラシック音楽に接することの少ない人々に音楽の楽しさを届けている。アカデミー生が将来プロのオーケストラのメンバーになった時に、このような活動は必ず求められることになるため、実戦的な経験の場であると同時に、広く音楽を届けることの意味を考えさせる機会になっている。

また、次項で詳しく述べるがフェスティバルを構成する重要な要素として、音楽芸術を身近なものとする活動があることに留意しておこう。

札幌と世界をつなぐフェスティバルであることは、北海道や札幌に閉じたものではないことを意味する。札幌のゆるぎない継続開催の決意と姿勢が、世界のリスペクトと高い評価をもたらすことは明らかで、「創造都市さっぽろ」が世界に開かれた都市であることを象徴するフェスティバルである。この点からも、PMF の国際性は極めて大きな意味を持っている。

3-2-2　将来に向けての課題と解決方向

3-2-2-1　フェスティバルとしての全体像

教育プログラムとフェスティバルとしてのプログラムの間のバランスが重要との認識を前提として、これまでの 30 回の継続で積み重ねてきたプログラムが、クラシック音楽を幅広く展望するものとなっているか検討してみることができるだろう。30 年の時間の流れの中で様々な実験をしてきたと言うこともできる。フェスティバルとしての観点から、過去に実施した企画の中で今日的な意味を付与することができるものがないだろうか。フェスティバルとして常に新鮮な驚きを提供したい。

3-2-2-2　平和を希求する音楽祭

平和を希求する音楽祭として、そして人種・国籍・文化の異なる若者たちが国際理解を実践する音楽祭として、その理念と希望の姿を世界に示すために、重要な国際会議などでの演奏機会を検討すべきである。また、平和の祭典であるオリンピック・パラリンピックが札幌で開催される折に、この世界的イベントとの連携を実現することは、世界に向けてのアピールとして極めて大きな意味を持つ。

3-2-2-3　札幌と世界をつなぐフェスティバル

PMF は札幌と世界をつなぐフェスティバルである。フェスティバルとしての華やか

さと賑わいを創り出すために、インターナショナルな教授陣とアカデミー生による演奏会に加えて、聴衆として世界から集まる人々の交流の場が実現することが望ましい。PMF は交流と相互理解の場を提供できるポテンシャルを持っている。この賑わいの創出のためには、組織委員会が企画運営を抱え込むのではなく、多様な組織やボランティア市民が主体的に関わること、運営面で開かれていることが必要である。

3-2-2-4　道外演奏会の意義の再確認

PMF のプログラムの最後を首都圏や関西圏での演奏会で締めくくるスケジュールが定着している。道外演奏会について、Kitara だけでなく日本を代表するコンサートホールで演奏する機会はアカデミー生にとって貴重な経験である一方、フェスティバルの独自性、希少性の観点から札幌に行かないと聴くことができないという状況を作ることも重要との考え方がある。道外における PMF の認知度向上、スポンサーへの謝意の表明なども含め、今後様々な観点から意義を再確認してよいだろう。

3-2-2-5　アジアで開催の意義の再確認

アジアを代表する音楽祭（フェスティバル）と広く認められる存在となることを目指したい。地理的条件から北海道・札幌は北に目が向きがちだが、世界の人口の 57%を占め、ダイナミックで成長著しい地域は南にある。この地域における音楽芸術の成長発展を支援し続けることは、バーンスタインの目指した夢を受け継ぐ PMF としての責務でもある。

3-2-2-6　バーンスタインのレガシーの継承

没後 30 年を経てバーンスタインは現在アカデミー生として参加している若者たちにとって、徐々に遠い存在になりつつある。バーンスタインが生涯最後の大仕事として創設した PMF を受け継ぐ者たちは、バーンスタインの功績を語り継がなければならない。バーンスタインの理念を現実化するという PMF のミッションには、彼の理念そのものを広く、繰り返し知らせていくことが含まれる。このことは、PMF の原点を繰り返し確認することでもある。同時に、原点を確認することは時代の要請に合わせてフェスティバルとしてのあり様を検討していくことにつながる。

3-2-2-7　ホストシティの市民からの幅広い支持、そして共有、共感

各種調査に示されているように、PMF は札幌市民に広く認知され、実際に多くの人が演奏会に足を運んでいる。PMF は札幌市民から一定の支持を得ているが、しかしそこで安心するのではなく、より深く理解してもらい、より積極的にかかわってもらえるよう、努力を続けるべきである。札幌の人々の共感を得られているかどうか、常に謙虚で客観的な目で見直しを続ける必要がある。

一つの方向性として、市民の参加の場が確保された、市民参加型の音楽祭の姿がある。

市民の参加には、多様な参加の形があり得る。演奏への参加から、運営への参加、アカデミー生との交流、さらには世界から集まる若者たちを温かく見守ることまで、様々な場を創出することが検討されてよい。

また、ホストシティとの連携の要として、ホストシティオーケストラたる札幌交響楽団との一層の連携強化が望まれる。

3-2-2-8　観光資源としての積極的活用

国際的なフェスティバルの成功が、広く全国、海外から聴衆を集めている実績に示されるのだとすると、PMF が国際的フェスティバルの地位を確立するためにはなお相当の努力を要する。一方、PMF はすでに札幌にとって貴重な音楽資産となっており、永続的開催の基盤を強固なものとする観点から、この音楽資産を有効に活用することが検討されなければならない。幅広く来場を促すための継続した取り組みが必要であり、そのためには道外、特に海外からの来場者の札幌滞在を豊かなものにする取り組み、例えば北海道の自然やアクティビティ、食と音楽の組み合わせといった複合的な機会の提供も検討に値する。しかしこれは組織委員会だけで出来ることではなく、観光産業や札幌市、道の観光施策との連携を考える必要があろう。その時、PMF を様々な形で活用してもらうという視点は、PMF に多様な聴衆を呼び込む、支持を集めるという観点からも検討に値する。PMF 本来の意義を逸脱しないようなコントロールは必要であり、同時に組織委員会が PMF 開催の成功に向けて業務に集中し、それ以外の“＋ α の仕事”が増えないような配慮も必要である。その上で、このような試みによってもたらされる波及効果を通して札幌の市民や事業者に、PMF をなくてはならないものと認識してもらうことも重要である。

3-3　音楽のあふれるまちにするための PMF

3-3-1　これまでの活動実績

前項のフェスティバルとしての PMF とは別に音楽芸術への導入や交流の場を PMF のミッションのひとつとして取り上げるのは、それが PMF の重要な特徴のひとつであり、組織委員会としてこの活動を音楽普及事業あるいは PMF の成果を広く市民に還元するものとして重要視しているためである。

フェスティバルの一環として PMF オーケストラのメンバーや教授陣は様々な形で市民との交流や、普段音楽に接することができない人たちに演奏を届ける活動を行っている。これらの活動はフェスティバルを彩るもう一つの重要な側面である。同時に、参加するアカデミー生たちに、音楽の持つ力を実感する機会を与え、演奏することの意味を深く考える機会ともなっている。

過去 30 年の前半で展開された活動は、聴講生制度、教育セミナー、楽器公開講座であった。聴講生制度は、登録、参加費支払いでオーケストラプログラムのリハーサルから本番までの見学ができる内容である。教育セミナーは小中学校の音楽教師を対象に、リハーサルの見学や教授陣のレクチャー、意見交換会が実施された。楽器公開講座は芸術の森の施設を使い、比較的少人数の希望者を対象に楽器ごとに教授陣のレクチャーや演奏が行われた。これらのプログラムはいずれもすでにある程度の関心と知識を持っている人たちや音楽の教育に携わる人たちが対象であった。それぞれに意味があり、また好評であったことにより、10 年以上継続して実施された。また、プログラムの提供者は教授陣であり、アカデミー生がかかわることは少なかった。

2000 年以降に開始されたプログラムでは、アカデミー生も関わり演奏を通じてコンサートホールには来られないような様々な聴衆に触れる機会を持つことになり、教授陣は中高生の吹奏楽のクリニックや、訪問リハーサル、マスタークラスを担当することになり、緩やかな役割分担が出来てきた。

図表18　交流と音楽への誘い

	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
アウトリーチコンサート						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
青少年のための音楽会*										○	○	○		○	○	■	■	■	■	■	■	■	■	■						
リンクアップ・コンサート																								○	○	○	○	○	○	○
公開レッスン（声楽、ヴァイオリン）			○																									○		
マスタークラス																													○	○
聴講生制度		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											
オープンリハーサル																				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
音楽教室・教育セミナー		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
吹奏楽クリニック・セミナー																								○		○	○		○	○
金管楽器クリニック																								○	○			○		
トランペットセミナー																									○					
訪問リハーサル																									○	○	○	○	○	○
楽器公開講座・（ミニ）トークコンサート		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○												
トークセッション															○					○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
ボランティアコンサート															○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
映像・録音・ライブビューイング																			○								○	○	○	○
楽器デモンストレーション・楽器体験イベント	○																												○	○
北海道大学との連携授業																										○	○	○		

＊ 青少年のための音楽会は2005年以降、ピクニック・コンサートのプログラムとして実施

アカデミー生主体で実施されているアウトリーチコンサートは、通常のホールでの演奏会ではなく、コンサートホールから外に飛び出して音楽を届ける活動である。通常の演奏会場ではない場所で、チケットの購入などせずに演奏を聴き演奏家に接することができるよう、演奏家が聴衆の方に近づいていって演奏するアウトリーチコンサートは、2005 年以降回数が増え 2019 年では 19 回の多きに達した。札幌市内各所の街角や小学校の体育館での演奏で、多くの、必ずしもクラシックファンではない人たちに将来を嘱望される若手音楽家の演奏を直接届けている。

クラシック音楽のファンの高齢化が指摘される中、次世代の聴衆を育てる活動は重要である。カーネギーホールで実績のあったプログラムを、日本の状況に合うようアレンジして 2013 年から始まったリンクアップ・コンサートは札幌市内の小学校 6 年生を対象とするコンサートである。1999 年から実施されていた青少年のための演奏会から大きく進化し、教育現場との連携による参加型のコンサートとなった。募集に応じ選ばれた小学校では 4 月からの 1 学期の音楽の授業を事前学習と合奏の練習にあて、Kitara の大ホールで PMF オーケストラとの共演を目指す。2013 年以降、60 校、4,605 名の小学 6 年生が参加している。毎年実施している来場者アンケート調査で、回答者の 54%がクラシック音楽を聴くようになった時期を小中学校の頃ないし就学前としている（2018 年調査）ことから、この時期の子供たちにオーケストラの演奏を聴き、共演するという経験が大きな意味を持つことは明らかである。また、演奏を終えステージから降りてくるアカデミー生たちの興奮し上気した顔は、彼らにとっても学びの場として大きな意味を持つものであることを示している。

メディアでは取り上げられることはないが、PMF にとって重要な活動がボランティアコンサートである。2004 年以降、毎年市民病院と養護学校や特別支援学校を訪問し、演奏を届けている。積極的にこの活動をリードしている教授は、この活動を PMF の中で最も重要な活動と位置付けている。

3-3-2　将来に向けての課題と解決方向

3-3-2-1　子ども世代への接近

小中学生までの時期に良質の音楽に触れることで、その後の人生を豊かに彩る音楽に親しむ下地ができる。豊かな感性を持つ子どもたちに良質なオーケストラ音楽に親しむ機会を提供することは、PMF の将来の支持者・参加者を生み出すということにとどまらず、日本のクラシック音楽の将来に貢献することになる。その意味で、リンクアップ・コンサートを継続することは日本の音楽界への貢献である。しかし、札幌市の市立小学校 201 校のうち、7 年間で 60 校に機会を与えたにとどまると言うこともできる。より多くの小学生が参加できるような工夫は意味のある挑戦である。

3-3-2-2　クラシック音楽への接近の機会

アメリカで音楽アルバムの総売り上げのうちクラシック音楽は 2.5%、ストリーミングによるダウンロード全体のうち 0.7%とのデータがある（Harper's Index, Harper's Magazine, Oct. 2019）とおり、多様化する余暇活動の中にあってクラシック音楽は必ずしも選択肢リストのトップではない。このことを冷静に受け止めたうえで、なお音楽の豊かな世界の魅力を、多くの必ずしも熱心なファンとは考えていない人々に伝える努力を続けなければならない。アカデミー生にとっても、この問題はプロの音楽家として明日にも直面する問題であり、PMF は実験と経験の場を彼らに提供することができる。

3-3-2-3　幅広い市民への接近と交流

様々な理由で演奏会に出向くことができない人々も多い。そうした人たちに豊かな音楽の世界を届けていくことは、アカデミー生にプロの音楽家としての多様な経験ができる場を用意する PMF として、重要な活動である。街の中に飛び出していくアウトリーチコンサートでは聴衆のすぐ近くで演奏でき、自分たちの演奏で街を行く人たちの足を止めることができるかどうかのチャレンジの場でもある。また、ボランティアコンサートでは、病院や養護施設、障がい者（児童）支援施設への訪問を通して、アカデミー生は音楽の持つ力を実感するだろう。これらの活動は今後も大事にしていかなければならない。

これらの一連の活動をより有意義なものとし、あわせて市民が多様な形で PMF に参加する場を実現するために、アカデミー生に過度の負担とならないような形で市民、聴衆と触れ合う機会を考えてもよいだろう。

3-3-2-4　IT 技術の活用

進展著しい IT 技術の活用により、これまでにはない形でクラシック音楽に接し、楽しむ機会を拡大することが期待できる。第 5 世代移動通信方式（5G）の普及が進み、第 6 世代開発も本格化しようとしている今日、コンサート会場以外の場所（街なか、家庭）で同時にコンサートを鑑賞したり、指揮者や演奏者の目線からコンサート会場の風景を見るといった新たな鑑賞の形が可能になる。さらに、聴衆の側にある演奏会への参加のしにくさを解消する試みに取り組むことで PMF は音楽鑑賞に関するバリアフリー化の実験の場を提供することが出来る。先進的な IT 技術を活用して、多様な音楽鑑賞の愉しみを提示し、潜在的な聴衆に近づいていくことに積極的であるべきである。そのためにも通信、放送業界との連携を検討するべきである。

3-3-2-5　市民参加型プログラムの開発

PMF では地元の中学・高校の吹奏楽部や音楽専攻生、アマチュアの合唱団、小中学生主体のジュニアオーケストラの出演を演奏会プログラムの中に組み込んできた。2019 年、PMF30 回記念のプレミアムコンサートでは、市民を中心に約 460 名の特別

合唱団を編成し、アカデミー生や教授陣らと共にマーラー「交響曲 第8番」に挑んだ。これほど大人数の市民参加によるプログラムは初めてのことであったが、大きな反響を得ることができた。参加者の多くは、PMF を自分たちの音楽祭と意識した瞬間だったのではないかと思われる。このような大がかりな取組みでなくとも、市民参加型のプログラムは市民と PMF の距離を縮め、共有と共感をキーワードに PMF を自分たちの音楽祭と感じてもらうとともに、地元への貢献、人材育成の観点からも大きな意味がある。札幌・北海道を拠点に活躍する音楽家、音楽を学ぶ子どもや学生、音楽活動を行う市民らが参加する機会を増やすための新たな試みを模索し、参加した市民が楽しめるものとする努力を求めたい。

3-3-2-6　修了生との連携による継続的な活動

PMF の開催期間以外でも修了生と連携することで、PMF の認知向上を目指す活動は展開できる。年間を通して音楽への誘いを続けることでもある。すでに実施している活動であるが、修了生と PMF とのつながりを維持する努力としても意味のある活動である。

第４章　持続的開催に向けて：継続性を確保する上での課題と解決方向

以上のように、パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌（PMF）のミッションにかかる将来的課題とは別に、第 4 章では、経済状況や産業構造の変化、働き方改革、モノやヒトの動態、少子高齢化社会、情報革命の進行、グローバリゼーションの進展とそれに対する反発、そして今般の新型コロナウイルス・パンデミック対応に象徴される突発的な事態など、PMF を取り巻く社会・経済環境の変化に即応しつつ、将来にわたって PMF がそのミッションを遂行し続けるために、直面するであろう問題点を可能な限り列挙して、行動計画の策定に資することとしたい。

４-１　組織

４-１-１　企画と運営体制の再構築

PMF 事業の企画運営体制は、様々な変遷を経て、現在は音楽家や音楽関係者による外部委員と PMF 組織委員会常務理事で組織する企画運営推進会議が担っているが、今後の継続開催に向けて中長期的視点に立った企画と効率的効果的な運営を確実にするために、あらためて企画運営体制を再検討する時期に来ている。

企画立案はこれまでと同様に、クラシック音楽に関する豊富な知識や経験、人脈を有する専門家による外部委員会を中核に、教授陣をはじめこれまで培ってきた人脈のネットワークを活用していくことを検討すべきである。一方、毎年の実施に関わる運営は PMF 組織委員会が担うことを基本とし、事務局スタッフの専門性向上を図り、職員体制の強化を進める必要がある。

４-１-２　持続可能な組織体制

PMF 事業の運営を担う組織委員会事務局は、事務局長のもと職員を配置し、総務・渉外・事業部門に分かれ事業を推進してきたが、2015 年以降、音楽祭の企画・運営を統括する事業部門の責任者が不在の状況が続いている。上記の企画運営体制の再構築を進めるためにも、企画と運営をシームレスにつなぎ、責任を明確にするために責任者を置くことが必要である。その上で、各部門の組織マネジメントの強化を図ることで、効率的な PMF 事業の推進を確実なものに出来る。

４-１-３　スタッフの人材育成と組織力の向上

PMF を今後も安定的に継続していくためには、PMF の実施運営を担う組織委員会スタッフの人材育成と最大限の活用が重要である。そのため、スタッフの能力と意欲を高めるための育成環境を整備するとともに、国の働き方改革も踏まえて日常の労働環境を改善しながら組織力を高めていく必要がある。また、音楽事業に関わる外部組織との連携を継続・深化させながらスタッフの専門能力を維持向上させていくとともに、場合によっては音楽に精通する外部人材の登用も検討に値する。

4-1-4　ボランティアとの連携

PMF の継続・発展には、市民の理解と協力が不可欠である。現在は「ハーモニー」、「PMF を応援する会」、「個人ボランティア」から一部事業の実施にあたり協力を受けているところであるが、松本市のセイジ・オザワフェスティバル、アメリカのタングルウッド音楽祭では、市民ボランティアがフェスティバルの運営に主体的に関わっている姿がある。現在確立維持できているボランティアとの関係を大切にしながら、他の音楽祭を参考にしつつ、ボランティアとの連携拡大を志向し、フェスティバルの運営全般に関わるサポート体制としてのボランティアの活動の再構築を検討すべきである。

4-2　ファイナンス

4-2-1　幅広い支援が必要

PMF の運営収入は、札幌市や北海道、国からの公的な支援と、民間企業からの協賛金・寄付金が多くを占めており、続いて演奏会チケット収入、個人からの寄付金、国内のファンデーションからの助成金により運営されている。

不安定な財政状況を安定化させていくためには、これまで同様の資金確保の努力を継続するとともに、新たな資金獲得手段の開拓が不可欠である。財政基盤の安定のためには、ホストシティの市民から広く支持されていることが前提条件である。市民と一体となって創る音楽祭という側面を生み出していく工夫が必要である。

4-2-2　支援組織の国際化

支援組織は、国内の企業、団体、個人が中心である。PMF は、優秀な若手音楽家を世界のクラシック音楽界に送り出し続けている。30 年の実績を踏まえると、海外のファンデーションや企業からの支援も得ることを検討する時期に来ている。教授陣やアカデミー生の国際的な構成にあわせて、支援を世界に求めることを考えてよい。芸術監督や指揮者、教授陣、修了生に協力を求めつつ、世界に名だたる団体、企業からの支援確保の可能性を検討するべきである。

4-3　広報・コミュニケーション

4-3-1　市民への説明・市民の理解

PMF は 30 回を迎え、札幌の夏の風物詩として定着し、平成 30 年には北海道遺産として認定されたところである。演奏会に訪れる聴衆のリピート率は非常に高く、熱心に応援してくれているファンが多く存在する。また、市民にクラシック音楽に親しんでもらうため、約 3 分の 1 の演奏会は、大通公園や地下街などで無料で気軽に鑑賞できるアウトリーチコンサートを実施してきた。こうした取組により、札幌市が実施する文化芸術基本調査によると、市内の文化芸術事業の中では、PMF を知っている市民の割合は約半数となっており、広く認知されていると言えるが、まだ PMF の意義を伝え理解を得るための取組について十分な余地があるとも考えられる。

PMF は一度失うと再び実施することは極めて難しい。30 回を経て、アジアでは最大の教育音楽祭として、市民の貴重な財産へと成長した PMF を、より多くの市民に理解してもらうための PR を強化していく必要がある。

4-3-2　道外、海外への情報発信

PMF2019 で実施した来場者調査において PMF の認知度を調査したところ、札幌市を除く道内では 3 割強、東京・川崎では 1 割強となっており、道外での認知度が低い状況である。バーンスタインに縁が深い、アメリカのタングルウッド音楽祭は世界的に認知度が高く、ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭はヨーロッパでの認知度は高いといわれている。

PMF がアジアでは最大の教育音楽祭として国内外に定着し、より幅広い支援を受けていくためには、様々な媒体を活用して道外、海外への発信を強化していく必要がある。

4-3-3　多様なコミュニケーションツールの活用

PMF の第 1 回が開催された 1990 年は、インターネットの黎明期で、ごく少数の人たちが利用しているに過ぎなかった。しかし、その後の 30 年は PMF の 30 年であるとともに、新しいメディアの興隆の 30 年でもあった。PMF は 1997 年に公式インターネットサイトを開設し、積極的な情報発信を開始、情報量は年々増大している。多くの人がますますインターネットメディアへの依存度を高めている中、より効率的・効果的なコミュニケーションを実現するためには、変化の著しいコミュニケーションツールの進展を見極めながら、情報の受け手にあわせてメディアの活用を考えるべきである。同時に、従来のマスメディアに依存する人たちもまだ多いことに配慮を忘れてはならない。

4-3-4　修了生とのコンタクト継続

修了生は世界 77 の国・地域から延べ 3,607 名が存在し、世界の主要なオーケストラの楽団員やソリスト、指揮者、教育者など様々な形で音楽に関わっている。彼らは PMF の貴重な財産であり、コンタクトを継続していくことは非常に重要である。PMF のさらなる発展のためには、修了生と良好な協力関係を築くことができるような仕組みを検討する必要がある。

4-4　その他検討すべき事項

4-4-1　不測の事態を想定したシミュレーションの実施

継続性の確保に向けて、自然災害や経済変動に伴う財務状況の変化、そして今般の新型コロナウイルス感染症の経験を踏まえながら、不測の事態への対処方法についてシミュレーションをしておくことが、影響を最小限にとどめるために有効である。同時に、組織としての知見を積み重ねていくために、毎年の実施に際して直面する様々な問題

をどのように解決したのかを記録し、あとに残すことも将来の不測の事態への対処の準備として意味のあることである。

4-4-2　SDGs（持続可能な開発目標）の視点を踏まえた取り組みの推進

2015 年 9 月に国連サミットにおいて採択された国際目標である SDGs には、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献や平和と公正への取り組みといった指針が含まれており、これらは PMF の理念、活動内容と重なるものである。SDGs への貢献を明示し、国際目標達成に向けて率先して取り組むことは、PMF の価値を高めとともに、国内外の幅広い支援を獲得することにつながるものであり、継続実施への道を確実にする一つの方途である。

4-4-3　ビジョンに沿った行動計画の策定及び定期的な活動点検

ビジョンは作成したら終わりではなく、ここが出発点である。このビジョンについて、何をどのように具体化していくのか、行動計画を策定し、実行していく必要がある。その取り組みにあたっては、定期的な活動点検により進行管理を行うとともに、PMF を取り巻く環境の変化も踏まえた活動評価の必要性も指摘しておく。さらに、評価結果を公開し広く透明性を確保することも健全で持続的な組織運営を確実なものとするために必要である。

第 5 章　PMF コミュニティが掲げるビジョン

以上を踏まえて音楽芸術を愛し、パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌（PMF）の理念に共感し、PMF に関わるすべての人たち（PMF コミュニティ）に共有されるビジョン（長期展望）は次の 3 点である。

(A.)　PMF は私たちの誇りとなる

PMF コミュニティ、札幌市民の積極的な参加と温かなまなざしで若手音楽家の成長を見守ることを通じて、私たちは他に代えがたい感動と達成感を享受することが出来る。この感動を多くの人たちと共に味わうことが出来ることを私たちは誇りに思い、広く世界に伝えていく。

(B.)　PMF は私たちの財産となる

PMF30 年の歴史を通して輩出され世界の音楽シーンで活躍を続ける優れた音楽家の存在は、世界のクラシック音楽界にとってかけがえのない共有の財産であり、PMF コミュニティは世界にその重要性を訴え続けていく。ホストシティとしての札幌はこの財産を大切に育み、さらに積み重ねていく中でこの財産からもたらされる果実を効果的に活用することで、永続的な開催の基盤を確固たるものとする。

(C.)　PMF は私たちの使命である

もはや 30 年の歴史を刻んできたことにより、私たちには継続への責任があることを認識する。バーンスタインが 1990 年 6 月 26 日に宣言したように、私たちも世界に向けてこの責任を全うすることを宣言する。

このビジョンの実現を目指して努力を積み重ねることで、「PMF は世界の憧れ」を実現し、7 月の札幌に国内外から多くの人が参集することで、音楽芸術の世界的拠点としての位置を確立する。そして、それは都市ブランドとしての“札幌”の確立と世界への発信でもある。

「平和のための音楽祭」、「音楽を通じて実現する平和」というバーンスタインの理念を最後に改めて想起してみよう。そのような理念の実現は理想に過ぎず、絵空事と訝る向きがあるかもしれない。しかし国家・地域間では必ずしも良好とはいえない国籍のアカデミー生たちが、ひとつの演奏のために真摯に向きあい、ひと月の研鑽を経て、互いの相違を認めた上で関係性を強めてゆく姿を目の当たりにすると、バーンスタインの理念の実現は決して盲信ではなく確信へと変わってゆくのである。それは確かにまだ弱い、小さな芽かもしれないが、そうした関係性を築き上げた修了生たちがやがて世界中で活躍し、絆を強めてゆくならば、しっかり根を張った平和の大樹へと育ってゆくことだろう。

21 世紀の世界は分断と内向き志向が顕著になり、様々な対立が顕在化しつつある。そう

した中で、言語や文化的背景の異なる 100 人の才能ある若者が音楽の高みを目指して相互理解と尊敬の念を持って努力する姿は、そして 1 カ月ほどの集中的な協働の結果としてそれを達成する姿は、世界に対してあるべきモデルの可能性を提示し、目指すべき方向を示すものである。バーンスタインの理念の実現を願う世界のすべての人たちが、PMF のコミュニティの住人であり、PMF はこの住人をひとりでも増やすことを究極のミッションとする。

対立、無理解、分断が世界を覆う中にあって、未来に向けての希望をもたらす何かが必要である。ここに音楽の力が必要とされる最大の理由がある。だからこそ、このビジョンに沿って PMF の開催を続けていくことが必要になるのである。

参考－ＰＭＦ将来ビジョンの策定経過等

１　PMF 将来ビジョンの策定趣旨

PMF 組織委員会では、この 30 年の間に 2 度、活動の検証と将来構想の策定を行ってきた。最初は、創設後 10 年を迎える平成 10 年（1999 年）に「PMF2000 年構想」を策定。2 度目は、平成 24 年（2012 年）に「新たなステージへ／PMF 新構想」を策定し、継続的な発展に向けた様々な取り組みを行ってきた。

しかしながら、近年、国内外の社会情勢は目まぐるしく変化しており、情報分野をはじめとする技術革新は私たちの生活様式を大きく変え、音楽の世界もけっして無縁ではなくなった。

そうした中、PMF の 30 回の節目に当たり、これまで PMF が果たしてきた意義をあらためて確認するとともに、時代の変化に対応しながら、世界に誇る国際教育音楽祭として定着させ、さらに、未来に向け持続可能な形で展開していくための方向性を示すことが必要であるとの認識に至った。

そこで、2019 年 4 月に外部委員会として PMF 将来ビジョン検討委員会が設置され、秋元克広札幌市長（PMF 組織委員会理事長）からビジョン策定の委嘱を受け、約 1 年 6 カ月にわたり議論を重ね、提言書としてここにまとめるに至ったものである。

２　PMF 将来ビジョンの策定に係る検討の経過

日程	会議内容等
2019 年 4 月 22 日	PMF 組織委員会理事長が将来ビジョン検討委員を委嘱
2019 年 5 月 27 日	**PMF 将来ビジョン検討委員会（１回目）** ・PMF 事業についての意見交換と論点の抽出 ・成果検証にかかる調査手法の検討 ・ワーキング部会の設置
2019 年 6 月 18 日	**PMF 将来ビジョン検討委員会（２回目）** ・成果検証にかかる調査手法の確認 ・PMF 将来ビジョン全体像・論点の確認と意見交換
2019 年 7 月 10 日 ～10 月 7 日	**グループインタビュー調査実施** ・教授陣、修了生、地元有識者、組織委員会職員の計 35 名に、PMF の成果や課題、今後も重視すべき PMF の価値等について個別及びグループによるインタビュー調査を実施 （株式会社 ニッセイ基礎研究所）
2019 年 10 月 11 日 ～11 月 7 日	**ウェブアンケート調査を実施** ・PMF がこれまで果たしてきた役割や成果を把握するため、1990 年～2018 年の PMF 修了生 1,715 人を対象にウェブアンケート調査を実施（株式会社 ニッセイ基礎研究所）

日程	会議内容等
2019 年 10 月 25 日	**PMF 将来ビジョン検討委員会（３回目）** ・PMF2019 の振り返り ・PMF が直面する課題について ・将来ビジョン案に向けた論点整理、議論の方向性に関する意見交換
2020 年 1 月 21 日	**PMF 将来ビジョン検討委員会（４回目）** ・PMF 将来ビジョン策定に係る調査業務の中間報告 （株式会社　ニッセイ基礎研究所　吉本研究理事） ・重要論点の協議
2020 年 2 月～7 月	ワーキンググループと委員の間でメール、オンライン会議で意見交換を行いつつ検討を継続
2020 年 8 月 25 日	**PMF 将来ビジョン検討委員会（５回目）** ・PMF 将来ビジョン案の協議
2020 年 9 月 16 日(予定)	**PMF 将来ビジョン 2020 を理事長へ手交、公表**

3　将来ビジョン検討委員会委員　◎座長　　【五十音順、敬称略】

氏名	所属
有塚　広之	札幌市市民文化局文化部長
◎北村　清彦	北海道大学大学院文学研究院 特任教授
木村　俊光	桐朋学園大学 名誉教授
小林　良輔	北海道経済連合会 常務理事
近藤　保博	京都市交響楽団 エグゼクティブプロデューサー
玉木　亮一	札幌交響楽団 テューバ奏者

オブザーバー・ワーキンググループメンバー

氏名	所属
宮部　潤一郎	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 研究員

4　PMF 将来ビジョン策定に係る調査

調査会社	株式会社　ニッセイ基礎研究所
調査期間	2019 年 6 月 19 日～2020 年 3 月 31 日
実施体制	吉本　光宏（研究理事・芸術文化プロジェクト室長） 大澤　寅雄（芸術文化プロジェクト室 主任研究員） 太田　真奈美（芸術文化プロジェクト室 研究アシスタント）